

目 次

1. 実施概要	・・・・・・・・P 1
2. 主催等挨拶 他	・・・・・・・・P 7
3. まちの点検	・・・・・・・・P 13
4. シンポジウム	
(1) 第一部 講演	・・・・・・・・P 29
(2) 第二部 パネルディスカッション	
	・・・・・・・・P 43
5. アンケート集計結果	・・・・・・・・P 65
6. 全体記録・資料	・・・・・・・・P 75

1. 実施概要

(1) 目的

世田谷区は、平成 29 年 12 月に国の共生社会ホストタウンに登録され、「ユニバーサルデザインのまちづくり」、「障害者スポーツの推進」、「心のバリアフリー」を柱として様々な取組みを実施している。

今年度の心のバリアフリーに関する取組みとして、アメリカ代表のパラリンピアン（車いすラグビー）を招き、アメリカの先進的な取組みを学ぶとともに、商店街のまち歩き等によりまちの点検や人的交流を行うことで、障害理解を深め、共生社会の実現を目指し、「心のバリアフリー シンポジウム」を開催した。

(2) 開催概要

① 開催時期及び場所

日時：令和元年（2019年）10月21日（月）13:30～16:00

場所：日本大学文理学部 図書館棟 3階 オーバルホール

② 名称

「共生社会ホストタウン」推進事業 心のバリアフリーシンポジウム
—アメリカ代表パラリンピアン（車いすラグビー）とともにまちの点検を通して考える—

③ 主催等

主催：世田谷区

共催：日本大学文理学部

後援：世田谷区商店街連合会、アメリカ大使館

協力：下高井戸商店街振興組合

④ スケジュール

10:00 まちの点検（下高井戸商店街）

13:00 開場・受付開始

13:30 シンポジウム開会

- ・主催者挨拶／世田谷区
- ・共催等挨拶／日本大学文理学部、アメリカ大使館
- ・車いすラグビー説明、映像上映
- ・国際親善キャンペーン「Thank You, Japan（サンキュージャパン）」紹介
- ・第一部 講演（パラリンピアン チャック・アオキ選手）
- ・第二部 パネルディスカッション

16:00 終了

※なお、まちの点検の事前準備として、10月4日（金）日本大学文理学部学生による、下高井戸商店街のまちの事前点検を実施した。

（3）参加者

① まちの点検 参加者（下記登壇者と重複する方は除く）

- ・グリズデイル・バリージョシュア（Barry Joshua Grisdale）氏
- ・世田谷区重症心身障害児（者）を守る会 会長 村井 やよい 氏
- ・NPO 法人世田谷区視力障害者福祉協会理事長 大竹 博 氏
- ・NPO 法人自立の家 菊野 弘次郎 氏

② シンポジウム

ア) 来場者 計 137 名

イ) 登壇者 ※挨拶以外の方の略歴は後述

- ・主催者挨拶 世田谷区教育長 渡部 理枝
- ・共催等挨拶 日本大学文理学部学部次長 岡 隆 氏
アメリカ大使館 広報・文化交流部文化担当補佐官
ケルシー・デリナルデイス 氏
- ・アメリカ代表パラリンピアン（車いすラグビー）
ジョー・デラグラブ（Joe Delagrave）氏
チャック・アオキ（Chuck Aoki）氏
ジョシュ・ウィーラー（Josh Wheeler）氏
チャック・メルトン（Chuck Melton）氏
- ・パネラー 下高井戸商店街振興組合 理事長 旦尾 衛 氏
ラグビー元日本代表主将、俳優 廣瀬 俊朗 氏
日本大学文理学部社会福祉学科 学生（視覚障害当事者） 瀧 楓花 氏
- ・コーディネーター 日本大学文理学部社会福祉学科 教授 井上 仁 氏

※グリズデイル・バリージョシュア（Barry Joshua Grisdale）氏は、急用のため欠席

③ スタッフ

世田谷区 障害福祉部障害施策推進課、交流推進担当部交流推進担当課、スポーツ推進部オリンピック・パラリンピック担当課、都市整備政策部都市デザイン課 計 16 名
日本大学文理学部 学生 13 名
NPO 法人日本アビリティーズ協会 4 名

※登壇者略歴（当日配布資料にも掲載）

○ジョー・デラグレーブ（Joe Delagrave）氏
（Wheelchair Rugby Classification：クラス 2.0）

1985 年生まれ。ウィスコンシン州ラシーヌ出身。
ウィスコンシン州プレアリー・デュシェイン 在住。
チーム/クラブ: Ability360 Heat



パラリンピック／2012 年ロンドン（銅メダル）
世界選手権／2010 年（金メダル）、2014 年・2019 年（銅メダル）

2003-04 年にウィノア州立大学でフットボール選手として活躍。2004 年 7 月ボート事故に遭う。5 人兄妹（3 女 2 男）。既婚。Braxton, Brayden, Brynley の 3 人の子どもに恵まれる。趣味は、ハンドサイクリング、キャンプ、旅行、家族と過ごすこと。

○チャック・アオキ（Chuck Aoki）氏
（Wheelchair Rugby Classification: クラス 3.0）

1991 年生まれ。ミネソタ州ミネアポリス出身。
ミネソタ州ミネアポリス 在住。



パラリンピック／2012 年ロンドン（銅メダル）、
2016 年リオ（銀メダル）
世界選手権／2010 年（金メダル）、2014 年・2018 年（銅メダル）

遺伝性感覚性自立神経性ニューロパチーtype II のため膝から下と腕から下に麻痺があり、人生の大半を車いすで過ごす。11 年間車いすバスケットボール選手として活躍した後、2005 年の映画「マダーボール」（邦題「殺人球」は、車椅子ラグビーのドキュメンタリー）に影響を受け、2009 年に国際大会デビュー。2011 年に US Quad Rugby Association's Athlete of the Year（4 人制ラグビー協会最優秀選手賞）を授賞。全米の学校で Classroom Champions のメンバーとして子どもたちの指導も行っている。国際パラリンピック委員会のウェブページにブログ掲載。趣味は、クロスワードパズル、読書、「ゲーム・オブ・スローンズ」、歴史小説、ミネソタスポーツ。

○ジョシュ・ウィーラー (Josh Wheeler) 氏
(Wheelchair Rugby Classification : クラス 2.5)

1980 年生まれ。カルフォルニア州サクラメント出身。
アリゾナ州ツーソン在住。

パラリンピック／2016 年リオ (銀メダル)
世界選手権／2014 年・2018 年 (銅メダル)

2006 年オートバイで走行中、車と衝突。首を骨折、下半身不随となり、右腕と手の一部も動かない。11 人兄妹 (男女 5 人)。既婚。スペイン語が堪能。



○チャック・メルトン (Chuck Melton) 氏
(Wheelchair Rugby Classification : クラス 2.0)

1978 年生まれ。ケンタッキー州マディソンビル出身。
イリノイ州リッチビュー在住。

パラリンピック／2016 年リオ (銀メダル)
世界選手権／2014 年・2018 年 (銅メダル)

2002 年、ダイビング事故で C7 脊髄損傷。5 年後、車いすラグビーを始める。既婚。Allison, Bailey and Blake の 3 人の子どもの父親。趣味は、釣り、狩り、できるだけ家族と一緒に過ごすこと。



○グリズデイル・バリージョシュア 氏
(Barry Joshua Grisdale)

カナダ生まれ。四肢まひ性・脳性小児まひにより、4 歳より車いす生活。高校卒業時に父親と一緒に日本に約 1 か月滞在。平成 19 年に来日し、平成 28 年に日本国籍を取得。都内で生活しながら、高齢者施設で勤務しアゼリーグループのホームページの Web マスターとして活躍しつつ、海外の障害者に向けた日本観光の英語情報サイトを運営するほか、これまでの知識・経験を生かし、国や自治体、企業が行うシンポジウムや講演会に参加する等、活躍中である。



○旦尾 衛（あさお まもる） 氏

下高井戸商店街は、江戸時代に甲州街道の第一宿場町として栄え、昭和47年に世田谷区で11番目の法人格を持つ組織として、下高井戸商店街振興組合を設立しました。

東西約700m・南北約500mに約300軒の店舗が軒を連ね食料品関係の店舗が多い「食の豊かな街」。商店街の中心に区立松沢小学校があり近隣の日本大学文理学部、日本大学櫻丘高校等がある「文教の街」。駅の東側にある映画館や「しもたか大さくらまつり（8月末）」、「しもたか音楽祭（10月末）」、「頑張れ日大！箱根駅伝順位当てクイズ（12月）」などの多彩なイベントを実施する「文化な街」。などの特徴があり、地域のコミュニティーづくりや安心・安全なまちづくりの担い手として、地域に愛される商店街です。



○廣瀬 俊朗（ひろせ としあき） 氏

5歳からラグビーをはじめ、慶応義塾大学に入学しラグビー部で活躍、その間、高校日本代表、U19日本代表に選出される。大学卒業後、東芝ブレイブルーパスに入団し、2007年に日本代表に初めて選出。その後2012年に再度、日本代表となり、主将に任命された。抜群のリーダーシップを発揮し、2013年には歴史的なウェールズ代表戦勝利の原動力となった。

2014年からはリーチマイケルにキャプテンの座を譲ったが、前回のラグビーワールドカップでも抜群の信頼感でチームを支えている。現在は、ラグビーワールドカップの解説など、ラグビーの普及啓発に取り組む他、俳優に挑戦するなど、活動の幅を広げている。



○瀧 楓花（たき ふうか） 氏

一般の小学校に通っていた8歳で錐体ジストロフィーを発症。視力の急激な低下により筑波大学附属視覚特別支援学校、東京都立文京盲学校と中学高校は盲学校に進学し、点字を習得。現在は日本大学文理学部社会福祉学科2年に在籍中。



○井上 仁（いのうえ じん） 氏

元東京都職員として児童養護施設・児童自立支援施設・児童相談所を経て2006年から現職。瀧さんとは、実習指導やフィリピン子ども支援ボランティアで一緒。負けず嫌いで、少し泣き虫ですが前向きに頑張る瀧さんを応援しています。



2. 主催等挨撈 他

(1) 主催者挨拶

世田谷区教育長 渡部 理枝

世田谷区教育長の渡部理枝でございます。本日は、共生社会ホストタウン推進事業「心のバリアフリーシンポジウム」にご参加いただき、誠にありがとうございます。開会にあたり、主催者の世田谷区を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。



本日は、日本大学文理学部の協力のもと、車いすラグビーのアメリカ代表のパラリンピアンの方をお招きし、講演やパネルディスカッションを行い、参加されている皆様とともに障害理解を深め、共生社会の実現を目指すことを目的としています。

また、サプライズゲストとして、テレビ番組「ノーサイドゲーム」にご出演され、皆様もよくご存知のラグビー元日本代表キャプテンの廣瀬俊朗さんを司会進行役としてお招きし、さらに華やかに開催できることになりました。

世田谷区は、アメリカ合衆国のキャンプ地として、選手団をオリンピック・パラリンピックで迎えますが、平成29年12月に都内の自治体としてははじめて、国の共生社会ホストタウンとして登録され、さらに、これまでの区の先導的・先進的な取り組みを評価いただき、10月11日に「先導的」共生社会ホストタウンに認定されました。

取組内容をご紹介しますと、区立小中学校において高齢者・身体障害者疑似体験を通じた「障害理解教育の実施」、多彩なチームが参加するボッチャ世田谷カップの開催などを通じた「障害者スポーツの推進」、馬事公苑までのルート上のサイン整備や段差改修の実施などを通じた「ユニバーサルデザインのまちづくり」、シンポジウムなどを通じた「心のバリアフリー」を柱として、オリンピック・パラリンピックやパラリンピアンとの交流をきっかけに共生社会の実現を目指すため、様々な取組を実施しております。

このあと、パラリンピアンの方からアメリカの先進的な取組みをご紹介いただき、午前中に行った下高井戸商店街のまちの点検を踏まえ、心のバリアフリーについて、様々な立場でご活躍されている方の貴重なご意見が交わされることと思います。世田谷区としましても、このシンポジウムが、共生社会の実現に向けた、力強いメッセージを発信する場となることを心から期待しております。

最後になりますが、本日ご参加の皆様のご健勝をお祈り申し上げるとともに、本シンポジウムの開催にご尽力いただきました、日本大学文理学部様、アメリカ大使館様、下高井戸商店街振興組合の関係者の皆様には、改めて感謝を申し上げまして、私からのご挨拶といたします。

(2) 共催等挨拶

日本大学文理学部学部次長 岡 隆 氏

本日は、日本大学文理学部にお越しいただき誠にありがとうございます。文理学部次長をしております、岡隆です。本来であれば、紅野学部長から御挨拶申し上げるところですが、本日は公務のため、私より御挨拶を申し上げます。



さて、世田谷区は、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックアメリカ選手団のキャンプ地となっております。その世田谷区に位置する我々日本大学文理学部は、世田谷区との連携・協力に関する包括協定を締結して、お互いの人的交流、知的・物的資源の相互活用を図り、地域社会の持続的な発展に貢献するべく、努力しております。

日本大学文理学部のなかにも、かつてはさまざま大きなバリアがありました。それらは、段差など建築にかかわる物理的なバリアだけでなく、身体的な障害をもった人や、精神的・心理的な障害をもった人に対する、心無いステレオタイプや偏見、差別などの心理的なバリアです。

物理的なバリアについては、これまでも、さまざまな障害を抱えた教職員や学生や地域のみなさんの助けも借りながら、その解消に努め、今では、歴史的建造物を除いてはほぼバリアフリー・キャンパスが達成されているのではないかと自負しております。

一方、心理的なバリアについては、ここ10数年、多様性と包摂を目標にしてさまざまな取組みをしてきましたが、心理的なバリアのなかには意識化すらできない根深いものがあることに気づかされております。しかし、解消が困難とはいっても、手をこまねいているわけにはいきません。心のバリアフリーを目指して、一つひとつ積み重ねていくことが肝要と心得ております。

本日、文理学部社会福祉学科と共に、心のバリアフリーを目指した、世田谷区主催のこのようなシンポジウムを共催できることを心より嬉しく思っております。

2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックにおいて、アメリカ選手団の皆様のご活躍を心より祈念し挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

Kelsey De Rinaldis Speech
Kokoro no Barrier Free Symposium

アメリカ大使館 広報・文化交流部
文化担当補佐官
ケルシー・デリナルディス 氏

*Setagaya-ku no
minasan,
konnichiwa !*



My name is Kelsey De Rinaldis. I'm the Assistant Cultural Affairs Officer for the Public Affairs Section at the U.S. Embassy in Tokyo. Thank you for inviting me here to the *Kokoro no Barrier Free Symposium* today. We are pleased to provide *koen* to this symposium.

And thank you for your generous hospitality and continued partnership in making a home for Team USA. Through this partnership with the Setagaya Ward Office, we have hosted various sports programs including Olympic Swimmer Anthony Ervin's clinic this past August, and Paralympic Wheelchair Rugby Player Chuck Aoki's school visit to Futako Tamagawa Elementary School last Thursday. Setagaya has already been a wonderful host, and we are learning the warmth of Japanese hospitality – *omotenashi*.

世田谷区の皆さん、こんにちは。

アメリカ大使館広報文化交流部、文化担当補佐官のケルシー・デリナルディスと申します。本日は心のバリアフリーシンポジウムにお招き頂きありがとうございます。このシンポジウムをアメリカ大使館より後援させて頂き、嬉しく思っております。

皆さま方にはチームUSAのホストタウンとして、そして継続的なパートナーシップを通じて我々を温かく受け入れて頂いていますこと、心より感謝致します。世田谷区さんとのパートナーシップを通してこの8月にはオリンピック水泳金メダリスト、アンソニー・アービン選手の水泳教室を開催したり、先週木曜日には車いすラグビーのチャック・アオキ選手による二子玉川小学校への学校訪問が実現しました。世田谷区による心温まる日本のおもてなしを受け、私たちも学ぶ事がたくさんあります。

Today, we are excited that Setagaya invited our friend Chuck Aoki, along with his teammates Joe Delagrave, Josh Wheeler, and Chuck Melton who will share the American views and how the Americans with Disabilities Act (ADA) has changed the lives and perspectives of Americans.

As they will highlight more in detail later, while the ADA ensures that people with disabilities have the same rights and opportunities as everyone else, there are still challenges and much rooms for improvement. I hope that today's symposium serves as an opportunity for Japanese and Americans to learn from each other, and for us to work toward our mutual goal of creating a barrier free society.

Thank you again for hosting us and Team USA. We look forward to continuing our partnership with you for a successful Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games. *Gambarimasho!*

本日は私たちの友人でありますチャック・アオキ選手を始め、彼のチームメイト、ジョー・デラグレーブ選手、ジョシュ・ウィーラー選手、そしてチャック・メルトン選手を迎え、アメリカの価値観や、障害を持つアメリカ人法、いわゆるADA法が、アメリカ人の生活や考え方に与えた影響などについて語って頂きます。

彼らより後程詳しい話がありますが、ADA法により障害を持つ方たちに健常者と同様の権利と機会が保障された一方で、社会には多くの課題と改善の余地があります。このシンポジウムが、バリアフリー社会を構築するという、日米共通の目標に向かって、お互いから学び合う機会になれば幸いです。

改めまして、チームUSAを始め、我々を温かく迎えて頂きありがとうございます。今後ともパートナーシップを通じて、東京2020オリンピック・パラリンピックの成功に向けて共に盛り上げていきたいと思っております。頑張りましょう！

(3) 車いすラグビー、「Thank You, Japan」キャンペーン紹介

車いすラグビーとは・・・

ラグビーやバスケットボール、アイスホッケーなどの要素が組み合わさった球技。バスケットボールと同じ広さのコートを使い、専用の車いすに乗った選手が4対4で対戦する。車いす競技のなかで唯一、車いすでのタックルが認められており、激しいぶつかり合いも見どころの1つ。



講演に先立ち、スペシャルゲストの廣瀬俊朗氏により、車いすラグビーの概要が説明され、また競技を紹介する映像も上映された。

今回登壇したアメリカ代表パラリンピアン4名は、前日の「車いすラグビーワールドチャレンジ2019」という大会で見事、優勝したメンバーであり、拍手で迎え入れられた。



国際親善キャンペーン「Thank You, Japan (サンキュージャパン)」

「東京2020オリンピック・パラリンピック大会がもたらすポジティブなレガシーに貢献し、オリンピック・パラリンピックの価値を日本の人々と共有すること」を目的とした、米国オリンピック・パラリンピック委員会のプロジェクトが発表された。Team USAの選手は、本キャンペーンを通じて、来夏行われる大会のホスト国を務める日本の人々への感謝を伝え、文化を体験し、競技の外で、日本との交流、ジュニア向けスポーツクリニック、またTeam USAの漫画の作成を含む日本文化とのふれあいなどのイベントを予定している。

会場内では、マスコミを対象とした、パラリンピアンがロゴを掲げてのフォトセッションも行われた。



3. まちの点検

(1) パラリンピアンとのまちの点検

10月21日、シンポジウム当日の午前中、パラリンピアン、当事者団体代表者とともに、日大通りを通して、下高井戸商店街を訪問（まちの事前点検と同じ店舗）。まちの点検とともに、地元商店との交流を図るなど日本文化に触れていただいた。

Aグループ：ジョー・デラグレーブ氏、チャック・メルトン氏、
菊野弘次郎氏（NPO 法人自立の家）ほか

Bグループ：チャック・アオキ氏、ジョシュ・ウィーラー氏、
グリズデイル・バリージョシュア氏、
村井やよい氏（世田谷区重症心身障害児（者）を守る会会長）
大竹博氏（NPO 法人世田谷区視力障害者福祉協会理事長） ほか



決して広いとは言えない道路のため、安全確保のため学生が前後について誘導するなど配慮した。



踏切の横断時には、溝や段差がある。体力のあるパラリンピアンは問題なく通行できるが、そのような人ばかりではないだろうとの指摘も。



報道陣の同行もあり、大勢での移動となった。



日本の風景を楽しまれている一面も。





店舗では、店内を見て回ったり、店員とディスカッションしたり、商品を購入（試食）したりするなど、交流を深めた。その中で、パラリンピアンより、「店内を動き回れるスペースが作られるとよい」、「誰でも高齢者になるのでバリアフリー化は将来への投資」、「バリアフリーと言っても大きな工事ではなく簡単な工夫でよい」、「来店できる人が増えればそれだけ売り上げにもつながる」、「よくしたいという願望が重要」といった意見が寄せられた。

また、同行者からは、パラリンピアンとの交流を通して「アメリカはボランティアが多いのでハード整備のことはあまり気にしていないと言っていて驚いた」、「店舗で、常に陳列されている商品については点字で案内をしてはどうかと提案していた。他の障害のことも気にかけている様子に感銘を受けた」など、アメリカの障害者の考え方に刺激を受けた様子だった。

(2) 10月4日(金) まちの事前点検

21日のパラリンピアンによるまちの点検に先立ち、日本大学文理学部学生が、当事者役も含めて役割分担をして事前点検を行った。その際の気付きを、21日当日打合せ時に、パラリンピアン等と共有した。

2019年10月4日(金) 下高井戸商店街 まちの事前点検

(日本大学文理学部学生による事前点検)

◎A班

- ・役割分担
- ①インタビュー：三橋・岡崎
- ②写真撮影：高野
- ③当事者役：瀧・佐々木
- ④介助者：池田・渡辺

・訪問店舗

- ①双葉屋(呉服・衣料品店)
- ②三笠屋(和菓子屋)

◎B班

- ・役割分担
- ①インタビュー：中山
- ②写真撮影：泉村
- ③当事者役：遠藤・中路
- ④介助者：古見・吉原

・訪問店舗

- ①漢方薬局 桃仁堂
- ②いづみや(豆腐屋)
- ③お茶のつるや

下高井戸商店街

甲州街道

下高井戸駅

A①双葉屋

A②三笠屋

B①桃仁堂

B②いづみや

B③つるや

日本大学文理学部

“ずっとしもたが”のこころ

ショッピングタウン 下高井戸商店街(振)

<http://www.ahtinstake.or.jp>

- ・下高井戸商店街は、東西約700m・南北約500mに約300軒の店舗が軒を連ね、食料品関係の店舗が多い。
- ・地域のコミュニティづくりや安心・安全なまちづくりの担い手として、地域に愛される商店街です。



普段通っている道だが、自転車や電柱が多く、障害者にとって危険なものであることに気づいた。



線路の溝に車輪がはまってしまうと危険だと思った。

道路は端の方に傾いているので、車いすを漕いでいると、知らぬ間に端にぶつかってしまった。



A班 ①双葉屋（呉服・衣料品店）



着物や浴衣などの和服だけでなく、バッグやハンカチ、履き物などの実用的なものも取り揃えている。



車いすで入店する際に、自動ドアのスイッチを切って長時間開いた状態にしてくれたため、焦らず入店することができた。



可動式の商品棚を使用していることで、車いすでも通れる幅を確保することができる。



奥にテーブルとイスがあり、お年寄りの集いの場としての役割もある。お年寄りが多いため、杖や歩行器を使うお客様がよく来店する。配慮が必要なお客様が来たときは、声掛けを積極的に行っているとのこと。

A班 ②三笠屋（和菓子屋）



障害者の方の来店はあまり多くないが、
障害があっても差別せずに接客しているとのこと。



商品が低い位置に並んでおり、車いすでも商品を
手に取りやすい。



店内が広く、車いすでも入店しやすい。また、対面式の接客のためお客様のニーズに合わせた柔軟な接客ができる。



下高井戸の名産物の「下高井戸餅」など多様な和菓子を
取りそろえている（試食させていただいた瀧さん）。

B班 ①漢方薬局 桃仁堂



処方箋ではなく体調不良などの時に必要なものを相談に応じて提供する。
商品はお店の方が、来店した方に合わせて商品を持ってくるとのこと。



特に年配者の方に配慮して
最近改修した。



車いすが、中まで入れる
ような動線があった。



神経過敏の方もいらっしゃるため、暖色系の照明でやさしいBGMが流れていた。



車いすの方は月に2,3名ほど来店。耳が聞こえづらい方とのコミュニケーションの取り方としては、筆談で対応するための紙を常備している。

B班 ②いづみや (豆腐屋)



色々な種類の豆腐をはじめ、豆腐関連商品（おから、おからドーナツ、プリン、杏仁豆腐、豆乳、ゆば、がんもどき等）がショーケースに横並びで入っていた。カウンター越しにやり取りをするので入店の必要はなし。



会計は、普段はショーケースの上のトレーを介して行われる。

状況に応じ、お店の方がトレーを下げたり、カウンターの外まで出てきて、商品やお金のやり取りをしたりする場合もある。





聴覚障がいがある方には、電卓で金額を伝えている。区の合理的配慮物品の助成があることを知らなかったが、区の職員が説明をしたところ、前向きに利用を検討したいとのことだった。



お子様連れの親御さんが会計などのために手を離している間、子どもの興味をひくため、おもちゃをカウンターに置いている。

B班 ③お茶のつるや



お客様との距離が近く、一人ひとりに合わせた対応を心掛けている。一回の来店で1時間近くお喋りすることもあり、高齢者の方にとっての居場所にもなっている。



ショーケースの中に高価な急須が陳列されてある。店主とお客様との間にショーケースがあるわけではないので、物理的な距離が近いだけでなく店主さん自身も親しみやすい方であった。



耳が聞こえない方には筆談で対応するため、メモ用紙をたくさん持っている。視覚障がい者の方には急須を触ってもらって紹介する。お茶の匂いを嗅いでもらったうえで購入を決めてもらうこともある。



金銭の授受が難しい利用客に対しては、財布の中身をカウンターの上に出してもらい、お店の方が会計金額をピックアップする。このやり方で視覚障がい者などへ対応している。

4. シンポジウム
(1) 第一部 講演

第一部 講演

—アメリカのアクセシビリティの現況について—

チャック・アオキ (Chuck Aoki) 氏



On behalf of the United States Olympic and Paralympic Committee and Team USA, I would first like to thank the city of Setagaya and Nihon University for hosting us at this Symposium on Accessibility. It is an honor to be here today, along with my wheelchair rugby teammates Joe Delagrave, Chuck Melton and Josh Wheeler, to engage in dialogue with the citizens of Setagaya around such a critical topic.

The topic of accessibility is an important conversation for not only the United States and Japan to engage in, but the entire world. According to the World Bank, 1 billion people, or 15% of the world's population, experience some form of disability. One-sixth of those individuals, or between 110 million and 190 million people, experience significant disabilities. Accessibility is a relevant topic regardless of nationality, and we thank the city of Setagaya for recognizing this and inviting us to be a part of the conversation here today.

初めに、米国オリンピック・パラリンピック委員会とチームUSAを代表し、世田谷区と日本大学の皆さまに、このようなアクセシビリティに関するシンポジウムを開催いただいたことに感謝の言葉を申し上げます。本日、車いすラグビーのチームメートであるジョー・デラグレイブ、チャック・メルトン、ジョシュ・ウィーラーと共に出席し、この重要なテーマに関して世田谷区民の皆さまとの対話に参加でき、光栄です。

アクセシビリティは、米国や日本だけでなく、世界全体で扱われるべき重要なテーマです。なぜなら、世界銀行によると世界の人口の15%に当たる10億人が何らかの障害を持っており、その内の6分の1に当たる1億1,000万人から1億9,000万人は、重度の障害を抱えているからです。ですから、アクセシビリティは国籍を超えたテーマであり、世田谷区がそのことを認識し、この度の対話に私たちをお招きいただいたことに感謝しています。

I am a native of Minneapolis, Minnesota in the United States, a two-time Paralympian, a PhD student at the University of Denver and, finally, a person who uses a wheelchair, and a proud disabled person. I have used a wheelchair for most of my life due to a genetic condition called hereditary sensory and autonomic neuropathies type II, which results in me not having feeling in my body below my knees and elbows. Before I share more with you about my personal experience of being a wheelchair user in the United States, I first need to touch on the U.S. legislation that has paved the way for more opportunities for individuals with disabilities in the United States.

The first piece of legislation is The Rehabilitation Act of 1973. The Rehabilitation Act was the original U.S. civil rights protection for individuals with disabilities in the United States. The focus of this act was to ensure that any individual was not discriminated against in employment, transportation and education programs that receive federal funding. This act was also amended in 1998 to include regulations that required federal agencies to make their technology accessible to those with disabilities.

The more well-known legislation in the United States that prohibits discrimination against individuals with disabilities in all areas of public life is the Americans with Disabilities Act, also known as ADA.

私は米国ミネソタ州のミネアポリス出身で、パラリンピックに2回出場した経験があり、そして、デンバー大学の博士課程に在籍しています。また、車いすの利用者であり、誇りある障害者です。私は人生の大半にわたって車いすを利用してきました。遺伝性感覚性自律神経性ニューロパチー2型と呼ばれる遺伝子的病状によって、膝から下と肘から先の感覚が麻痺しているためです。米国での車いす利用者としての私の体験を詳しくお話しする前に、障害を持つ人々により多くの機会をもたらすことになった米国の法律について、触れておく必要があります。

最初の法律は、1973年の「リハビリテーション法」です。このリハビリテーション法の下、米国で障害を持つ人々の米国市民としての権利が初めて守られることになりました。この法律で特に重要なのは、連邦政府の補助金を受けている雇用、交通、教育プログラムにおいて、いずれの個人も差別されないことが保障された点です。この法律は1998年に改正され、その中では、連邦政府関係機関の技術を、障害を持つ人々でも利用しやすくすることが義務付けられました。

米国でもっとよく知られている法律はADAと呼ばれる「障害を持つアメリカ人法」で、一般生活のあらゆる領域で障害を持つ個人に対する差別を禁じています。

This act was signed as a civil rights law in 1990 and its main purpose is to ensure that people with disabilities have the same opportunities and rights as everyone else. The ADA covers five areas that relate to public life: employment, state and local government, public accommodations, telecommunications and miscellaneous provisions.

I remember the first time I heard of the ADA, I didn't fully grasp how unique it was. This Act protects my rights in a way that is not matched legally in many other countries. One of my first role models growing up was a man named Justin Dart Jr., a disabled man who was one of the pioneers in the disability rights movement. I was so inspired by his story that as a high school freshman, I wrote an essay on him and the history of the ADA for a state writing competition. I didn't win, but I have never forgotten the impact that he and so many others have left on my life.

The first area focused on employment is designed to help people with disabilities access the same employment opportunities and benefits available to people without disabilities. This means that employers must provide accommodations like modifications to a job or work environment that will allow an applicant or employee with a disability to perform necessary job functions or participate in the application process.

この法律は1990年に市民権法として署名されて成立し、その主たる目的は、障害を持つ人々が他の誰とも同じ機会や権利を持つようにすることでした。ADA法は、一般生活における5つの領域として、雇用、州政府及び自治体、公的施設、電気通信、その他の規定をカバーしています。

初めてADA法について聞いたときは、それがどれほど独自のものであるかを私は十分理解できなかったと記憶していますが、ほかの多くの国では障害者には認められていない権利を米国で認めたということです。私が子供の頃から模範としてきた人のひとりに、ジャスティン・ダート・ジュニアという障害者がいます。障害者権利運動の先駆的な人物のひとりで、ADA法制定の一番の貢献者です。彼の活動に大いに感銘を受け、高校1年生の時には、ダート・ジュニアとADA法の歴史についての小論文を書いて州の作文コンテストに送りました。賞は取れませんでした。ダート・ジュニアやその他大勢の人々が私の人生に与えた影響を忘れたことは一度もありません。

ADA法の第一の領域である雇用については、障害を持たない人々が得られる雇用機会と恩恵を、障害者も受けられるように支援することを目的としています。つまり、雇用主は、障害を持った応募者や従業員が必要な仕事をこなしたり応募プロセスに参加したりできるように、業務内容や職場環境を改善するなどの措置を取る必要があります。

This employment area of the ADA has similarities to Japan's Act on Promotion of Employment of the Disabled.

The next area, state and local government, prohibits discrimination by public entities in their services, programs and activities they provide. This area includes school, university, and community sports programs as well as transportation. For transportation it outlines detailed standards for the operation of public transit systems. For example, when I ride the bus to work, or the subway, I can feel confident that I will be able to safely access the transportation. This is crucial for many with disabilities, who may not be able to have personal transportation for any number of reasons.

The third area is public accommodations. This area prohibits private places of public accommodation like hotels, restaurants, doctors' offices, sports stadiums and movie theaters from discriminating against people with disabilities. It sets minimum standards for accessibility in new construction of facilities as well as alterations of previously existing facilities where it is easy to do so without much difficulty. It also sets communication standards that must be offered for customers with vision, hearing and speech disabilities. This particular standard is critical, and it allows me to feel at least somewhat comfortable that when I attend public spaces, I will be able to access the venue.

この ADA 法の雇用に関する部分は、日本の障害者雇用促進法と似ています。

続いての領域は州政府と地方自治体についてであり、公的組織が提供するサービス、プログラム、活動における差別を禁じています。これには、学校、大学、地域のスポーツプログラムのほか、交通機関も含まれます。交通については、公共交通機関の運営に関する詳細な基準が示されています。これにより、例えば、私が職場に向かうためにバスや地下鉄に乗る場合、安全に交通機関を利用できるという確信が持てます。障害を持つ多くの方はさまざまな理由から個人的な交通手段を持つことができないため、これは極めて重要です。

三番目は公的施設で、ホテル、レストラン、医務室、スポーツ競技場、映画館のような公的施設の私的な場所において、障害を持つ人々への差別を禁じています。施設の新規建設や既存施設の改装について、大きな困難なく容易にアクセスするための最低基準が定められています。さらに、視覚、聴覚、発話の障害を持つ顧客に提供しなければならないコミュニケーション手段の基準も定められています。この基準は極めて重要であり、私が公共の場に出席する場合でも会場に到達できることに最低限の自信を与えてくれます。



Fourth is telecommunications. Under this area telephone and internet companies must provide a nationwide system of services that allow individuals with hearing and speech disabilities to communicate over the telephone.

The final area is miscellaneous and covers a wide range of topics such as insurance, the ADA's relationship to other laws, as well as defining certain conditions that are not to be considered disabilities.

In 2008, amendments were made to the ADA, specifically to the definition of disability.

Although the United States has made strides in the realm of accessibility domestically, at the international level, it has yet to ratify the Convention on the Rights of Persons with Disabilities, an international human rights treaty of the United Nations. U.S. president Barack Obama signed the treaty in 2009, but our congress still has not ratified it. Japan, on the other hand, joined more than 170 other countries and ratified the treaty in 2014. This is something the people of Japan should be proud of, especially in light of article 30 of the CRPD, which emphasizes participation in cultural life, recreation, leisure and sport. To many people in the United States, our country's inaction is a source of disappointment and a sign that more progress and acceptance is needed.

四番目は電気通信です。ここでは、電話やインターネット企業が、聴覚や発話の障害を持つ個人でも電話で通話することを可能にするサービスシステムを全国的に展開することを義務付けています。

最後の部分は、その他の規定であり、保険やADA法のその他の法律との関係といった幅広い話題をカバーしています。障害とは見なされない特定の状態についての定義も示されています。

ADA法は2008年に、特に障害の定義に関する改正が行われました。

米国は国内でのアクセシビリティの領域で大きな進歩を遂げてきましたが、国際的なレベルでは、国連の国際人権条約である障害者の権利条約をまだ承認していません。2009年にバラク・オバマ米国大統領がこの条約に署名しましたが、議会による批准は行われていません。一方日本は、170ヶ国以上の輪に加わり、2014年にこの条約を批准しています。この条約の第30条では、文化的な生活、レクリエーション、余暇、スポーツへの参加を強調しており、この条項だけを考えても、日本人々が誇りに思っただけのことだと思います。米国の多くの人にとって、自分の国が行動を起こしていないことは残念なことであり、一層の進歩と受け入れの必要性を示すものです。

Clearly, even with the help of the ADA, in the United States there is still a lot of room for progress. According to the 2010 U.S. Census, there are around 56 million individuals, about 19% of the population, who have a disability. 8 million people have difficulty seeing, including 2 million who are blind or unable to see. Roughly 30 million Americans have difficulty walking or climbing stairs, or use a wheelchair, cane, crutches or walker.

My personal experiences with accessibility in the U.S. have varied greatly. In my lifetime, I have seen a shift in awareness and openness to making places and activities more accessible, although much work remains to be done.

Looking at the sports industry as an example, in the United States we are beginning to see more and more attempts to mainstream disability into programs traditionally for those without disabilities, such as in fitness races like “Tough Mudder”, and with workout programs like CrossFit, which have specific training modules and programming for disabled athletes. We are seeing a growing awareness of Paralympic sport, both through simple acts such as the recent name change of the United States Olympic and *Paralympic* Committee, which puts Paralympic front and center, to more and more coverage of Paralympic sport at all levels.

米国には ADA 法の支援があるものの、まだ大きな進歩の余地があります。2010年の米国の国勢調査によれば、障害を持つ人は人口のおよそ 19%、約 5,600 万人に上ります。800 万人は視覚に困難を抱えていて、そのうち 200 万人は盲目であるか見る能力がありません。また、およそ 3,000 万人のアメリカ人は、歩行や階段の昇降が困難であるか、車いすやステッキ、松葉杖、歩行器の利用者です。

私個人の経験から言えば、米国のアクセシビリティは大きく変わってきました。改善の余地はあるものの、場所や活動へのアクセシビリティがより高くなる社会の認識や柔軟性の変化を見てきました。

スポーツ業界を例に見てみると、米国では、従来は障害のない人向けとされていたプログラムでも障害者に対応する動きが増えています。「タフマダー」のような体力勝負のプログラムがその例であり、クロスフィットのようなトレーニングプログラムでは、障害者選手のための特別なトレーニング・モジュールとプログラムがあります。パラリンピックスポーツの認識も向上しています。最近米国の委員会がオリンピック・パラリンピック委員会に名称変更したこともその一つで、パラリンピックを表に出すことになり、あらゆるレベルでパラスポーツが取り上げられる機会が増えています。

These changes came about thanks to the inclusion of Paralympic athletes in the governing process of the Olympic and Paralympic movement in the US.

However, what remains somewhat unchanged in the U.S. is often the attitude towards disability itself. What I am about to talk about reflects my experiences as a disabled person in the U.S., and I should preface that my experience may differ greatly from others. That said, in my experience, I have not faced outright discrimination because of my disability, in the same blatant and direct ways that people of color too often face it. The types of challenges that I have faced when it comes to accessibility are largely those of attitudes. What I mean by this, is that one of the biggest challenges people with disabilities in the United States still face today is that we are often viewed as helpless, and in constant need of assistance. Too often, we are still seen for what we *cannot* do, rather than everything we *can* do.

This manifests itself in many ways. A common example is one that happens when I am out in public with a group of people, or even just with my girlfriend, and we go to a restaurant. Even if I am the first person to enter the restaurant, or greet the host, or something like that, there have been many times in which I am ignored and looked past in favor of addressing someone without a disability.

この変化は、米国のオリンピック・パラリンピック運動の運営プロセスにパラリンピックの選手が参加するようになった結果です。

一方で、米国であまり変化していないこともあり、大きなものは、障害そのものへの姿勢です。これからの話は、米国での障害者としての私の体験によるものであり、ほかの人の体験とは大きく異なる可能性があることを、あらかじめお断りさせてください。と言うのも、私は、肌の色に起因した、よくあるあからさまで直接的な差別を、障害があることによって受けた経験はありません。アクセシビリティに関して私が直面してきた課題は、概ね心の姿勢に関するものでした。どういうことかと言いますと、障害のある人々は無力で常に助けを必要としていると見られることが多いということです。

何ができるかではなく、何ができないかという観点から見られることが多すぎるのです。そしてこのことが、米国の障害者が今も直面している最大の問題なのです。

この傾向は、様々な状況で見られます。よくある例として、私が何人かの人と一緒にときやガールフレンドと二人だけのときにレストランなどの公共の場に行ったとしましょう。一番先にレストランに入ったり店主に声をかけたりしたのが私だったとしても、私を通り越して障害のない別の人が対応の対象になることが何度もありました。

Now, when I go out with my friends who also use wheelchairs, that really messes with them! In all seriousness though, it is these sort of interactions that lead to our greater accessibility challenges in the U.S. That same restaurant may be completely accessible in terms of physical access. What remains unchanged, however, is the ways in which many still think about disability. This raises a few questions that those without disabilities should consider: whose job is it to teach and change these attitudes? Should disabled people have to do all the work in educating those without disabilities? What actions can you take to learn, and educate others about interacting with people with disabilities?

This limited sort of thinking leads to other challenges, such as when people with disabilities do not do what is “expected” of them. When I say “expected”, I am referring to the idea that many people have preconceived notions of what a person with a disability can and should do, which can lead to dissonance and frustration when these expectations are interrupted. A simple example of this comes from when I ride public transportation to get around, a common mode of transportation for people with disabilities. When I ride, I sometimes sit on a seat instead of in my wheelchair, as it is more comfortable to do this on longer trips and it feels safer. This is not usually a problem. However, there still are times in which the bus driver will look at me and tell me I must sit in my chair.

一方、車いすの友人らと出かけたときには、店員はかなり混乱します！しかし、真面目な話として、そのような出来事は、米国での大きなアクセシビリティの課題につながっています。このようなレストランは、物理的な点では十分なアクセシビリティを備えているかもしれませんが。しかし、障害に対する多くの人の考え方は以前と変わっていません。これは、障害を持たない人々が考えるべき問題をいくつか提起しています。このような姿勢を変えるための教育は誰がすべきなのでしょう。障害を持たない人の教育は、障害者がすべてしなければならないのでしょうか。障害を持つ人々とのコミュニケーションについて自ら学んだり他人に教えたりするために、どのようなことができるのでしょうか。

この一つの検討からも別の課題が見えてきます。例えば、障害を持つ人々が「期待」される通りに行動しなかった場合の問題です。「期待」とは、障害を持つ人ができることやすべきことについて多くの人が持っている先入観のことであり、期待通りではなかった時には、不快感や不満を持たれることにもなります。私が公共交通機関を使って出かけた時の経験を分かりやすい例として挙げます。障害を持つ人々は、公共交通をよく利用します。乗り物では、私は車いすではなく座席に座ることが時々あります。長距離の移動ではその方が快適で、安全に感じるからです。座席に座るという普通は問題にならないことでも、バスの運転手から車いすに座るよう注意を受けることが、まだあります。

Now, I know that there is no law saying this, and quite frankly, so do they. However, my not sitting in my chair defies the construction of what a person with a disability can and cannot do for this person. People with disabilities are viewed as static, as fixed in what they are able to do.

Even though I experience limiting attitudes from individuals regarding disability from time to time, I do see change occurring in two main ways. Both involve a changing perspective and focus on how persons with disabilities are viewed.

First, there is growing awareness of something called the social model of disability. This is in contrast to the long-held conception of disability in the “medical model”. In the medical model, disability is construed as what’s wrong with you. Using a wheelchair. Having a visual impairment. Limb loss. The emphasis then becomes to fix the person, rather than considering how the world around them helps to construct disability. I should note that this medical model can still be useful in developing things to help people with disabilities, such as wheelchairs and the service dog industry, if people with disabilities are included in the process. But it is not enough.

そんな法律がないことを私は分かっていますし、おそらく運転手も分かっているでしょう。しかし、車いすに座らないという行動は、運転手が考える「障害者がしてもよいこと、してはいけないこと」に反するものなのです。結局、障害を持たない人々は、障害を持つ人々を固定観念で捉え、私たちが「できること」を制限してしまうのです。

このように、障害に対する限定的な態度は時々見られますが、それでも、二つの大きな点で変化が起きていると感じます。そのどちらも、障害を持つ人々への考え方の視点や焦点の変化に関係しています。

第一に、障害の社会モデルについての認識の高まりです。障害の社会モデルは、以前からある「医学的モデル」による障害の捉え方とは対照的なものです。医学的モデルでは、障害は何らかの問題と理解されます。車いすが必要だとか、視覚が不十分だとか、手足がないということです。これでは、障害を治療し社会に適応させることが重視され、周りの社会が障害を作り上げる一因となっている、ということに考えが及びません。医学的モデルは、車いすや介助犬など、障害を持つ人々を助けるものの開発においては、障害を持つ人々がそのプロセスに関わる限り、今も有益だと思います。しかし、それだけでは十分ではありません。



The social model of disability helps fill the gaps left by the medical model. It puts the focus on the surrounding environment of a person, and how that environment is what causes disability to exist. That is to say, a person who uses a wheelchair is not disabled until they encounter a building with no ramp, or a store with no accessible bathroom. The goal here is to focus on how we can improve the world we live in, rather than trying to “fix” the person. This has led to all sorts of wonderful innovations, particularly the advocacy of “universal design”, which is a broad strategy that considers the way that spaces are constructed to be accessible for everyone, regardless of ability level. This can be everything from a new workout facility built without any stairs to facilitate easy access to ensuring that professional presentations always include captioning, sign language interpreters, and anything else needed to make a presentation accessible. This new way of thinking helps to reconceptualize disability. It gives us a framework through which we can seek to improve the world around us, and to understand how different behaviors and actions help to create disability.

A second major way in which I have seen disability shift and change in the U.S., and again, really across the world, is a focus on the ability of what people can do. This builds on the social model of disability, as it helps to create a society which focuses on what people can do, rather than what they are unable to do.

障害の社会モデルでは、医学的モデルで見過ごされている点を補い、周りの環境を中心に捉えることで、どのような環境が障害を引き起こしているのかに着目します。つまり、車いすの利用者も、スロープのない建物や利用できるトイレがないお店に行くまでは障害を持っていないということです。社会モデルの目標は、障害を「治療する」ことではなく、生活環境をいかに改善するかということに焦点を当てることです。この視点によって、様々な素晴らしい革新が生まれました。特に、「ユニバーサル・デザイン」という幅広い戦略が提唱され、能力レベルに関係なく誰もが利用できるような空間を作る方法が考案されています。このユニバーサル・デザインはあらゆるものに及び、例えば、新しい運動施設を作るときには階段をなくし、専門家のプレゼンテーションでは必ずキャプション表示や手話通訳者など、誰もがプレゼンテーションに参加できるようにあらゆる手段が尽くされるということです。この新しい考え方は、障害の概念を見直すきっかけとなる以外にも、周囲の世界の改善を可能にする枠組みとなり、また、従来の多様な振る舞いや行動が障害を生み出す原因となることとの理解につながります。

私が目にしている障害に関する大きな変化の2つ目は、これも米国だけでなく世界全体でのことですが、「人が何ができるか」に注目が高まっている点です。これは障害の社会モデルから発展した考えであり、社会モデルは、人が何が「できない」かではなく、人が何が「できる」かに注目する社会作りに役立っているのです。

Can you guess what one of the major drivers of this shift is? An element of society that is advancing attitudes toward what people with disabilities *can* do?

SPORT! *Sport* is a major driver of this momentum in many communities. And not only on the elite level, but all the way down to the recreational level as well. People with disabilities who participate in sports are visual reminders of agility, strength, quickness, stamina and talent. We are weekend warriors and elite athletes. We demonstrate what *can* be accomplished and knock down misperceptions about limits.

Just as importantly, people with disabilities who participate in sport are healthier, they are more engaged with their communities, and they are far more likely to be employed. All of these things help to demonstrate to societies that people with disabilities are not burdens on the community, or drains on public goods, but rather that they are meaningful members of society, who can and do contribute.

These shifts in attitudes and perspectives are excellent developments in the march towards true equality for persons with disabilities. I think that the United States has a lot to offer the world in this arena, but I am also keenly aware that we still have much progress to be made. And we have a lot to learn from the rest of the world ...

この変化の大きな原動力の一つを、何か思い浮かべますでしょうか。障害者が何ができるかということへの注目を前進させる社会的要素は何でしょうか。

スポーツです！ スポーツは多くの社会の中でこの動きの大きな原動力になっています。トップクラスだけでなく、レクリエーションに至るまで、あらゆるレベルでそうになっています。スポーツに参加する障害者は、機敏さや力強さ、素早さ、スタミナ、そして才能を目に見える形で気づかせてくれます。私たちは週末に戦うエリート運動選手です。私たちは、達成できることを示すことで、限界に対する誤解を打ち崩します。

同様に重要なこととして、スポーツに参加する障害者はとても健康で、地域社会との関係が深く、仕事を得られる可能性もずっと高くなっています。これらのことは、障害を持つ人々が社会のお荷物ではなく、公共財産を浪費しているわけでもなく、むしろ社会貢献可能な、あるいはすでに貢献している意味ある一員であることを、社会に対して示しています。

このような姿勢や視点の変化は、障害を持つ人にとっての真の平等に向かう素晴らしい進歩です。この分野で米国は世界に提供できるものが多くあると思いますが、まだ多くの前進が必要だということも強く認識しています。そして、世界から学ぶべきことも多くあります。

Starting here with Japan, our 2020 Olympic and Paralympic Games hosts! My teammates and I have felt welcomed and embraced on every trip we've made to Japan. We are watching with excitement as your preparations for the Games come together, and have noticed and appreciated how much has been done to advance the Paralympic movement in Japan along with progress around accessibility issues. And by hosting events like today's Symposium on Accessibility, our hosts and all of you here today are contributing to a better future for people with disabilities in your country and around the world.

Once again, thank you to the city of Setagaya for hosting this Symposium on Accessibility and for inviting my teammates and me to participate in dialogue around such an important topic. We also thank the city of Setagaya for hosting Team USA during the Tokyo Games as the home of the Team USA High Performance Center at Okura Sports Park. Team USA athletes are so fortunate to have such an incredible home base during the Games, and we're grateful to the entire community of Setagaya for welcoming us so warmly. We are honored to prepare and train in your community.

Coming off this week's World Wheelchair Rugby Challenge, I can say firsthand that the Tokyo Games will be amazing. My teammates and I have visited, and trained at, the great competition venues and met so many enthusiastic locals.

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の開催地の皆さま、この日本が始まりです！ チームメイトも私も、日本に来る度にいつも歓迎と温かさを感じてきました。大会の準備が形になりつつあることを、期待を込めて見ております。また、日本でのパラリンピック運動の前進やアクセシビリティ問題に関する進歩のために多大な尽力があったことも認識しており、素晴らしいと思っています。そして、本日のアクセシビリティ・シンポジウムのようなイベントを開くことで、主催者や本日お集まりの皆さまは、日本だけでなく世界の障害を持つ人の未来を改善することに貢献しているのです。

最後にもう一度お礼を申し上げます。アクセシビリティに関するシンポジウムを開催し、このような重要なテーマについての対話に、チームメイトと私をお招きいただいた世田谷区の皆さま、ありがとうございました。また、世田谷区には、東京2020でチームUSAのホストとなり、大蔵運動公園にチームUSAハイパフォーマンス・センターを設置していただけることにも感謝いたします。チームUSAの選手が大会中にこのような格別な施設に滞在できることは幸運です。私たちを温かく歓迎していただいている世田谷区のすべての皆さまに感謝しています。世田谷区で準備とトレーニングができることは光栄です。

先週行われた車いすラグビーワールドチャレンジに向けて、チームメイトも私も素晴らしい競技会場を訪れ、トレーニングを行い、また、熱心な地元の人々と出会うことができました。

We are excited about what awaits the competitors and spectators in 2020. We are so grateful for the hard work that's going in to preparing for the Games, and for the enthusiasm the people of Japan have shown in welcoming us. When Team USA arrives in Tokyo and the 2020 Games are officially opened, we will celebrate alongside the people of Japan – and fans around the world – as another chapter in the story of the Olympic and Paralympic Games begins.

Thank you for including Team USA and myself in these important discussions. We look forward to continuing the conversation around accessibility and to returning to your beautiful city soon.

直接体験したからこそ、東京 2020 が素晴らしいものになると確信しています。2020 年に何が選手と観客を待ち受けているか、楽しみです。大会の準備に向けての大変な努力や日本の人々からいただいている熱い歓迎に、とても感謝しています。チーム USA が東京に到着して 2020 年大会が公式に始まる時に、私たちは日本の人々と共に、また世界のファンと共に、オリンピック・パラリンピック大会のストーリーの新たな一幕が始まることをお祝いするでしょう。

この重要な対話にチーム USA と私を含めていただき、ありがとうございます。アクセシビリティに関する議論を継続し、この美しい街にまたすぐ戻ってくることを楽しみにしています。



4. シンポジウム
(2) 第二部 パネルディスカッション

それがラグビーの持つ価値観だと思います。海外の人も、試合が終わったらおじぎをしてくれるし、日本の文化を取り入れて、日本をリスペクトしてくれる。お互いがお互いをリスペクトし、良いラグビーをして、いろんな人に喜んでもらいたいという、その視点が素晴らしいと思います。

■井上／ラグビーでは有名な「ノーサイドの精神」があります。一方、車いすでも激しく、相手の車いすを壊すぐらい激闘しますね。

■Melton／Of course, there are situations where the chairs break, but we never know if it's our fault or the other guy's. We have lots of spare wheels ready during matches so they can be switched out.

■井上／車いすの進化はすごいと思うのですが、ラグビーを通してみると、車いすはどのように変化していますか。

■Delagrave／Before wheelchair technology began to evolve, we used typical wheelchairs like the one I'm in now for matches. The chairs we use now are expensive, they're made of aluminum and titanium. Wheelchairs designed to properly fit our bodies and suit their role on the courts were developed. Some of the players have really expensive chairs that are worth around \$10,000.

■井上／最先端の技術が使われているのですね。オリンピックは、最高の技術と、選手のスキルと、戦う心とがそろって初めてできると思うのですが、パラリンピックの面白さは、道具の進化もあると思います。それについてどう考えていますか。



■メルトン／はい、もちろん車いすは壊れることはありますが、それは自分のせいか、相手のせいか分かりません。試合では、すぐ取り替えができるよう、いろいろな車輪を用意しています。

■デラグレーブ／今ほど車いすが進化する前は、いま私が座っているような普段の車いすでプレーすることもありました。今はアルミやチタンを使った高価な車いすになっています。我々の体にしっかりフィットする、コート上での役割にフィットする車いすが開発され、例えば1台1万ドルというような高価な車いすを使ってプレーしています。

■Aoki／As mentioned before, the equipment we use has really evolved. For instance, videos of the wheelchair rugby from the 1950s show players using normal chairs like the one I'm using. But the chairs we use now are customized to completely fit our bodies. The best equipment in the world allows us to perform at our absolute peak. Using this kind of equipment makes people with disabilities want to try participating. I think this kind of progress is good for athletes and for everyone else too.

■井上／スポーツをやっている中では、チームメイトがお互いに意見を言うことがとても大事なことだと思いますが、皆さんは日頃、どのような関係ですか。

■Delagrave／I started participating in the team from 2010, but to be honest the relationship side of things didn't go well for the first 3 years. But after that there started to be less distance between us, we became friends, or almost like a family.

■Wheeler／Last night we went to karaoke together, so I think it's safe to say we're friends. I think we're really close as a team. Sometimes there are pretty strong differences of opinion, but that's because people want to express themselves for the team.

■井上／激しく意見がぶつかり合うとのことですが、ぶつかったとき、最後はスポーツですから、1つの答えを出さないといけないと思います。そのときは、どうされるのですか。キャプテン、あるいは監督など、役割があると思います。皆さんのチームは、どのようにされているのでしょうか。

■アオキ／先ほどお話がありましたが、我々が使う機器は本当に多大な進化を遂げています。例えば1950年代の車いすラグビーの映像では、今私が座っているような普通の車いすでプレーしています。今の機器は、完全に我々の体にフィットするようにカスタマイズされたもので、それによって世界最高のパフォーマンスが、世界最高の機器で可能になっています。そういった機器を使ってプレーすることで、障害を持った方も、いつかプレーしたいという気持ちになります。アスリートにとっても人々にとっても、素晴らしい進化は良いことだと思います。

■デラグレーブ／私は2010年にチームに参加して、最初の3年ぐらいは、関係がうまくいかないこともありましたが。ただその後、チームはお互いの距離が近くなり、選手同士は家族であり、友人であると思っています。

■ウィーラー／昨晚も一緒にカラオケに行きましたし、仲が良いと言えます。非常にお互いの距離が近いチームだと思います。互いに意見を激しくぶつけ合うこともありますが、それはチームのために意見をしっかり表明することをしています。

■ Wheeler / Me and Melton are the co-captains of the team. We check things when we need to and work together to make sure that the team functions well. We've split our roles into good co-captain/bad co-captain.

■ 井上 / チームをまとめるとき、どこに苦労されますか。意見が強い人もいると思いますが。

■ Melton / There's a lot we do to ensure everyone is heard. Sometimes we have meetings with just two or four people to highlight challenges, watch videos of matches to work out where problems are, and try and come up with solutions as a team.

■ 井上 / 廣瀬さんは元キャプテンとしていかがですか、ジャパンチームは。チームワーク、話し合いは、やはりスポーツでは大事なことですよね。

■ 廣瀬 / ラグビーは、監督やコーチはコーチングボックスにいて、直接指示は出せないの、選手の中で意思統一されていることが、とても重要です。いつも日本代表が大事にしていることは、勝利もそうですが、存在意義、ミッションなどを、みんなで共有できること。それが、チーム作りの大事なポイントかなと思います。

■ 井上 / コートの中には監督もいなくて、相手のプレーによって自分たちのバリエーションを変えないといけないとき、誰がどう判断しているのか、見ている側には分からないのですが、フォーメーションを変えたりなどは、どのようにされているのですか。

■ ウィーラー / 私とメルトンは、コ・キャプテン（共同主将）としての役割があります。必要があれば確認をしたり、チームがうまく機能するように一緒に役割を果たしています。良い方のコ・キャプテンと悪い方のコ・キャプテン、役割分担しています。

■ メルトン / チームをまとめるために様々なことをします。時には少人数、2～4名でミーティングをし、課題を明確にし、動画を見て、ここが間違っているとか特定し、チームとして解決策を見出そうとしています。



■廣瀬／グラウンド上にアタックのリーダー、ディフェンスのリーダー、ぶつかり合いのリーダーがいるので、イニシアチブをとっています。トライをとった後とか、誰かがケガをしたときなどの（試合が中断している）1分くらいに、まとめて話すことも大きいですし、客観的に見えないときにはコーチングボックスからインカムを通して、アイデアをもらいます。メディカルトレーナーやウォーターボーイ（水を持って行く人）などを通して情報をシェアしたりもします。

■井上／車いすラグビーは4人ですよ。4人で意見をまとめるときはいかがですか。コートの中で行っているのですか。

■Aoki／Teamwork is very important. Our motto is that we need to be frank and ensure people's true opinions are heard. Sometimes we have long, bitter arguments where no one will admit being at fault. But we trust and respect each other, so this means we let reveal our true opinions on the pitch.

■井上／なかなかシビアですね。15人と4人では、その辺はずいぶん違う感じでしょうか。

■Aoki／15-person rugby is done on a really big pitch, but the rugby we play is done on a pitch around the same size as a basketball court with a total of 8 players. But just as with regular rugby, we have to make use of the space and acquire lines. The basics of play aren't that different. Of course, the numbers of players are different and there are also a lot of other differences too.

■アオキ／チームワークが重要です。私たちは腹を割って本音を伝え合うことをモットーとしています。時に、「お前が間違っている」と言ったとき、向こう側が「間違っているのはお前だ」ということもあって、辛辣な厳しいやり取りが続くこともあります。お互いに信頼、尊敬の念を持っていますから、それを前提として、ピッチでは本音をぶつけ合うようにしています。

■アオキ／15人制のラグビーは、ものすごく広いところで戦いますが、私たちはバスケットボール規模のピッチで、計8人で戦います。共通しているのはスペースを活用する、ラインを獲得していく、その基本的な戦い方は、この2つのスポーツで違うことはありません。もちろん、フィールドにいる人数が違いますので、いろいろな面で違いもありますが。

商店街のおもてなしとバリアフリー

■井上／コミュニケーションで、チームをつくる話をしましたが、商店街も似たような感じですよ。私たちが、まちの事前点検（10月4日に実施）に行かせてもらった際、理事長さんとは熱い議論をしました。商店街はいろいろな種類のお店がありますが、まとめていくときはどのような感じでしょうか。スポーツと違い、1つ1つのお店の利益などを考える必要もあると思いますが。

■旦尾／企業などでは勤務時間は一律だと思いますが、商店はまちまちです。物販店なら昼ですし、飲食店なら夜とか。集まる時間も変えた方が良いのではということもありますが、なかなか現実的にはできません。我々も、お互いの立場を尊重し合うことが、まずあると思います。我々の商店街理事会は今 40～50 代が中心になっています。ほかの商店街に比べて比較的若い。我々の場合、競技とは違い、そこで急に意思を伝えるわけではないですが、話し合いでは、できるだけ皆の意見を聞いて、しゃべっていない人がいたら、その人にも聞くようにしながら、今、問題となっていることを解決するようにしています。

■井上／商店街として苦勞されていることも多いと思います。下高井戸商店街は、都内でも下町の雰囲気を残している商店街です。昔ながらのおもてなしの心が残っていて、うちの学生たちもおもてなししてもらいました。“おもてなし”について、商店街としてはどのように考えていらっしゃいますか。

■旦尾／店では、対面で話をする人が多いです。お客様もいろいろなタイプの方がいらして、話しかけられると緊張する人もいるし、どんどん話してもらいたい人もいます。



そういう方たちのイメージを感じ取りながら、店頭や店内で話をしたりします。例えば、今日の話にも関係してきますが、我々の商店街は、近代的とも言いきれない。品物が通路にあったりもします。お客様が手に取りにくいこともあるかもしれませんが、それを感じ取って話しかけながら、そこら辺を気づいてさしあげる。このあたりは統計的には若い人口が多いのですが、やはり買い物にいらっしゃるのは年配の方が多いです。車いすの方でなくても、歩きにくいようであれば、通路の物をどけたりもします。

下高井戸の商店街は生鮮三品が強いと言われます。近所の方々の食料品の面で、いろいろと支持をいただいていると思います。

■井上／私たちがまちの事前点検に行ったときも、車いすが通れないとき、理事長さんのお店（呉服・衣料品「双葉屋」）では丁寧に対応してくださって、「コミュニケーションをとりながら対応します」とおっしゃっていました。ほっこりして帰ってきました。瀧さんは、まちの事前点検のとき、どう感じましたか。

■瀧／今回、初めて理事長さんのお店に行きました。通路が通りやすくないとか、品物が分かりやすいところに置いていないとか、謙遜されていましたが、それよりも、普段から障害を持っている人たちが障害のない人と同じように買物を楽しんだりできるような、声かけが一番必要だと思っています。まちの事前点検に行ったときに、店員さんも温かい雰囲気ですべてくださったので、そういう意味では（ハード面では）バリアフリーではないかもしれないけれど、心のバリアフリーは進んでいるのかなと思いました。



“挑戦”に対するバリアフリー

■井上／障害のある方もない方も、挑戦する機会が誰にでも公平にあると、アオキさんの話にもあって心を打たれました。瀧さんもこの夏、何か挑戦していましたよね。

■瀧／日大のサークル「SalamatA」でフィリピンの子どもの支援をしているのですが、フィリピンに実際に行って、子どもたちに教育の大切さを伝えるための劇とダンスのパフォーマンスをしてきました。

■井上／私も一緒に行ったのですが、瀧さんを見ていて、つい「ダンスは良いから、あなたはナレーターだけやっいなさい」と言ってしまったのです。何かに挑戦することに対して、人の可能性を奪っちゃいけないと講演で言われ、少し責められているような気がしました。瀧さんも、自ら努力をして仲間から教わって踊っていました。9曲のダンスを踊ったんだよね。すごく良いと思いませんか。瀧さん、挑戦してみてくださいか。

■瀧／今、先生がおっしゃっていましたが、最初「瀧さんはダンスはやらなくて良い」と言われました。それは、先生なりの優しさだったと思います。でもメンバーが手伝ってくれて、一緒にできるようにダンスの振り付けも教えてくれた。私も1人でできることは家で練習したりして、努力はしました。

■井上／挑戦するとき、ほかの人たちが助けられることに対して、瀧さんはどういうふうに感じていますか。例えば、助けられると言っても、それはいらないと思うこともあるだろうし、いろいろな思いが交錯すると思います。



アオキさんの話にもありましたが、何でもしてもらおうことが、私への手助けじゃないよ、と思う部分があると思います。実際どうでしたか。

■瀧／最初に関わったときは、メンバーはほとんど初対面で、まず障害者と関わったことがない子が多かったと思います。その中でまずは、してくれることの全てを受け入れて、感謝の気持ちを伝えるようにしていました。次第に、「これはできるんだ」とか、サポートしてくれる子も分かってくれるようになり、私も「これは要るけど、これは要らない」と伝えられるようになってきました。そういうことを言える関係になったことが、一緒にパフォーマンスをできた一番の理由で、大切なことじゃないかと感じました。

■井上／助けてくれるという人の優しさが、必ずしも障害者の方々にはプラスにならないこともあります。そういうとき、アメリカではどのように反応されるのでしょうか。人の優しさがお節介になることもあると思いますが。

■Delagrave／You wouldn't normally just go up and touch someone for no reason, but for some reason if you're in a wheelchair, people will go up to you and try to help out. As teammates we try to help each other. Trying to help or support other people is just a normal, human thing to do.

■井上／それを「やらないでね」と言う時が難しいですね。「自分でやりたいんだけど」と言うときは、どう対応されるのですか。

■Aoki／I really think this is a communication problem too. Communication needs to be direct and strong.



■デラグレーブ／普通は、人は何の理由もなく、誰かに触ったりすることはないですが、車いすに乗っていると「お助けしましょうか」と言われることがあります。

チームメートの中でも、お互いに助け合ったりするわけですし、人に対して何か助け、サポートをするというのは、人間として極めて普通のことだと思います。

■アオキ／やはり、これもコミュニケーションの問題だと思います。直接しっかりコミュニケーションする。

When I think to myself “I can do this,” it’s important to say “It’s ok, I can do it” as soon as possible. I was discussing perception before. If you say clearly “I can do this” it can help to change peoples’ perceptions.

■井上／社会の中では、1人で移動する場面があると思いますが、そのとき、相手との信頼関係や関係性のない人に出会って、「これをしてほしいんだけど」と頼むときは、アメリカの方々は「良いよ、OK」となるのでしょうか。

■Melton / Most people will help out. Sometimes people just aren’t interested, so you have to wait around until you can find someone who is.

■Aoki / Sometimes in America the problem is that too many people want to help.

■井上／特に皆さんは、体が大きく丈夫そうですが、「ごめんなさい、重くて運べない」と言われることはないですか。

■Delagrave / As you said, I have a big body, but even then, there are people who want to help me. Sometimes if the person can’t do it alone, they have to call someone else.

■井上／瀧さん、日本はどうでしょう。

■瀧／助けてくれる人が多くて困ってしまうという話はとても衝撃的です。日本ではそのようなことはあまりなくて、逆に、助けてくれる人がいなくて困ってしまうのが現状です。

「これはできる」と自分で思ったときは、「大丈夫、できます」と、早めに伝えることが重要だと思います。先ほど、認識の話をしました。「これはできます」としっかり伝えれば、相手の認識も変わると思います。

■メルトン／大体、助けてくれる方は多いです。ただ、あまり興味を示さない方もいるので、そういったときには時間をかけて、助けてくれそうな方を待つこともあります。

■アオキ／アメリカでは、助けてくれる人が全然いないということより、助けてくれる人が多すぎるほうが、より困ることかなと思います。

■デラグレーブ／おっしゃったように、私は体が大きいほうですが、それでも助けたいという方はたくさんいます。1人で無理なら、人を呼んで2人で助けてくれることもあります。

■井上／瀧さんは、何の問題もないようにスムーズに歩いているから、助けてもらえないのでは。

■瀧／丁寧に助けを求めても、助けしてくれない人が多いです。

社会を変える力

■井上／先ほど、コミュニケーションで社会を変えろという話が出ました。皆さんは、ラグビーを通して可能性にチャレンジしていますが、スポーツにも社会を変えていく可能性を持っていると思います。どういうことで社会が変わると思いますか。

■Aoki／ I think there are two ways that society can change. The first is in a physical way, that is visible. For example, this would be people participating in sports and getting healthy and having opportunities to get involved in their communities. The second, which I touched on during my speech before, is on how disability is perceived. For instance, when my mom sees me playing football, she says I don't seem disabled at all - she forgets I have a disability. She sees me as an athlete, not someone with a disability. That's another way in which society's perceptions of disability can change. I believe these are the two main ways society can change.

■アオキ／2つ、社会の変わり方があると思います。1つ目は、はっきりと目に見える形の変化。例えば、人々がスポーツに携わってより健康になったり、地域社会に関わるようになって、目に見える形で社会が変わっていくことが1つあると思います。

もう1つは、私が先ほどのスピーチで申し上げたことにも関わりますが、障害の捉え方が変わると思います。例えば、私の母親は、私が車いすラグビーでプレーしているのを見ているとき、「この子が障害を持っているとは思わない、障害を持っていることをつい忘れてしまう」と言います。一障害者ではなく、一アスリートとして見てくれる。そのような形で、社会の障害に対する捉え方が変わると思います。目に見える形で変わるものと、目に見えないけれど社会が変わる、この2つがあると思います。

■井上／廣瀬さん、ラグビーを通して、子どもたちのことなど、先ほどもメッセージを発信していただいているようですが、ラグビーを通して社会を変えるのは、結構難しいテーマですよ。いかがでしょうか。

■廣瀬／スポーツはドラマを描けないというか、シナリオ通りにいかないのが、その瞬間をいろんな人と共有できる喜びがあるのかなと思います。試合を観に行ったら、隣の人と友達になるのも、人生が豊かになる意味で良いのかなと。直接的に社会を変えることはなくても、その人の人生を豊かにすることで、社会が自然と豊かになることに寄与できているのは素晴らしいと思っています。

パラスポーツに関しては、自分たちの固定概念を変えてくれる。例えば、ブラインドサッカーでは、応援している時は声を出さず、心の中で応援しなければいけない。皆さんのスポーツのスタイルとは違う。音を鳴らして応援するのはダメなんですよね。アスリートに音が聞こえなくなるから（注：ブラインドサッカーでは、転がると音の出るボールを使用してプレーする）。このように、自分たちの固定概念を外してくれるのも良いところだと思います。

■井上／商店街では、駅伝の順位当てクイズなど、日大のスポーツをすごく応援してくれています。スポーツがまちを変えていくと感じたことはありますか。

■且尾／選手が一生懸命走ったり、何かに向かって見ている様子を見たとき、我々は違う環境にいますが、そのときは同じような気持ちになって見られます。敵も味方もいますが、一生懸命な普段と違ったものを我々に与えてくれるということがあると思います。



■井上／スポーツには、感動を与えてもらえますよね。そこがどうまちづくりに繋がっていくのか。アオキさんの話だと、スポーツがきっかけで障害者のことを理解してもらって、まちを変える。ADA 法など、アメリカは一歩も二歩も進んでいます。

これから、皆さんがスポーツを通して社会を変えていくという中で、ここがポイントだというのをお一人ずつお聞かせ願えればと思います。

■Delagrave／This is part of our team culture, but I believe that working to enhance each other is extremely important. Obviously, I want to win, but it's not just about that - I focus on the process too. Working to enhance each other helps us be better people. This is true regardless of whether you play sports or not, or have a disability or not. It helps to change society.

■Aoki／When people watch pro sports, you can see a wide variety of emotions on their faces. But connecting these emotions to actions is difficult. It's difficult, but also important. Having emotion and energy at the level of regional society, then eventually bringing it down to an individual level. We need to welcome the passion felt when watching sports and then utilize it. I think that the Olympics and Paralympics are really good examples of succeeding at this.

■井上／廣瀬さんは、いかがですか。

■廣瀬／スポーツに限らずですが、自分が今いるコミュニティともう1つ、別のコミュニティができることは、人間的にもチーム的にも安心して生きていくには必要だと思います。



■デラグレーブ／やはり我々のチームの文化としてもありますが、お互いを高め合うことが非常に重要だと思います。もちろん勝ちたい気持ちはありますが、それだけではなく、プロセスを重視する。お互いを高め合って、よりよい人間になるということです。これはスポーツをやっているとき・やってないとき、障害がある・なしに関係なく、それによって社会が変わっていくと思います。

■アオキ／特にプロスポーツを観客、視聴者が見ているとき、感情がいろいろ湧き起こると思います。それをアクションにつなげること、ここがかなり難しいと思います。ただ、難しいけれどそれが重要で、感情、エネルギーを地域社会レベル、ひいては個人レベルに落とし込むことが重要です。スポーツを見るときに感じる熱意を受け入れて活用していくこと。オリンピック・パラリンピックはそれを実現する、非常に良い1つの例だと思います。

ここしかないとなると、そのコミュニティがしんどければ全てがしんどくなりますが、もっと違うコミュニティがあって、そこで息抜きができて、いろいろ話ができるとなれば、楽に生きることができる。スポーツじゃなくても、違うコミュニティを持つことは大事ではないかと思います。

パラスポーツは、やってみるのが一番早いと思うので、体験して、その感覚を持つことも大切なと思います。ぜひやってみて、車いすの難しさとか、いかにこの人たちがすごいかということを感じていただき、その上で実際に観にいくと、もっと面白くなると思います。



「ノーサイドの精神」

■井上／皆さんから素晴らしい発言をいただきました。とは言え、強い相手と当たって「あいつには負けたくない」と思うこともあると思います。ラグビーは「ノーサイドの精神」がありますが、人の心ですから、ライバルがいれば倒したいと思うでしょうし、負けた時は悔しいでしょう。そのようなときはどうされていますか。

■Aoki／Wheelchair rugby also has a spirit of “No Sides.” When a match ends it doesn’t matter if we’re enemies or friends, we’re all just members of the rugby community.

■井上／本当にそう思えるものでしょうか。心の中では違うことを思っていたりして（笑）。

■廣瀬／それじゃ、あの笑顔はできないと思います。嘘の笑顔では感動しないと思います。

■井上／なぜラグーマンたちは、「ノーサイドの精神」を身につけられるのでしょうか。

■アオキ／車いすラグビーの世界でも「ノーサイドの精神」はあります。試合がいったん終わったら、敵味方関係なく、車いすラグビーのコミュニティの一員だと感じています。

■廣瀬／自分たちだけじゃラグビーはできないし、相手が強いからこそ、自分たちのトレーニングも頑張れるという精神を持っています。元々ラグビーはレフェリーがいなくて、互いに選手同士で戦ってきたという歴史もあるので。“自分たちだけがよければハッピーというわけではない”というのも、初めから持っている価値観だと思います。

■Aoki／I believe that wheelchair rugby has two major aspects.

The first is physical. If you have a strong sense of rivalry, you need to let that out on the pitch. That's because rugby is a contact sport that allows for tackling.

The other aspect is that everyone who is playing the sport is there because they've had a life changing injury. Going through an experience like that makes us members of the same community, being friends or enemies is irrelevant.

■井上／「ノーサイドの精神」って難しいところがあります。勝ちたいし、成功したいし、失敗したくないし、失敗したらどうしようかという気持ちもある。

「ノーサイドの精神」をお持ちの皆さんから、ぜひ子どもたちや若い人にメッセージを。

■廣瀬／自分が本当に出し切ったという思いがあれば、自然と相手に対する尊敬の念が生まれると思います。それがないと、邪心や誰かに何かを求めたりすると思うので、全力を尽くすということが大事だと思います。

■井上／日本のスポーツが難しいのは、勝たなきゃ意味がないという指導者が多くて、子どもたちが負けると怒鳴られたりとか、そういう指導をよく見かけます。廣瀬さん、そこは大事ですよ。

■アオキ／車いすラグビーは2つの側面があると思います。

まず、フィジカルな部分。ライバル心を燃やしているとき、それはピッチ上で表現すれば良い。タックルができるコンタクトスポーツなので。もう1つの側面は、車いすラグビーをやっているということは、誰しものが人生を一変させるケガなり、そういった悲しい経験をしているので、そういったことで敵味方関係なく一員だという感情を持っています。



■廣瀬／個人的には、勝敗だけで人を評価するのは極めて問題だと思っています。勝ち負けはコントロールできるものじゃなく、相手があるものです。もちろんそこに対する評価もある程度は必要になりますが。

もう1つ大事なのは、自分の成長に対する評価。去年より今は良いね、今日より明日よくなるだろうねと、ちゃんと見てあげることが、教育として必要だと思います。

■井上／今廣瀬さんがおっしゃった、スポーツが果たす教育の役割、アメリカではいかがですか。アメリカのスポーツは、勝つことだけではなくて楽しむスポーツだ、とよく言われますが、どうでしょう。

■Delagrave／ In America, youth sports are a gigantic industry. That's partially because it's so profitable.

The desire to win, though, comes from the fact that sports require skill. It's also because there's an image of creating and using strategies during matches to win.

I have a kid. My hope for my kid is that they will learn to play sports using the right methods in the correct way. If they do, this will show that it's not all about winning.

■井上／素晴らしいですよ。そういう考えを持った指導者が、いっぱい日本にもいてくれるとうれしいです。

■デラグレーブ／アメリカは今、若い人のやるスポーツが1つの大きな産業になっています。それが大きな利益をもたらしている側面もあります。

なぜ、勝つことにこだわるのかということですが、やはりスポーツをするからには、技術が求められます。また作戦、戦略を通じて試合を行って勝つイメージがスポーツにはあるからでしょう。

私は子どもがいます。その子どもに対して私が願うことは、正しい方法で、あるべき姿でスポーツをやってもらいたいということです。すると、勝つだけが全てじゃないということになります。

相手に敬意を持つ

■井上／ここで会場の皆さんから質問を受けたいと思います。ワールドチャンピオンに会うことはなかなかないですし、元キャプテンもいて、商店街のキャプテンもいますよ。

■会場／下高井戸商店街の理事長さんにお聞きします。ワンチームの日本代表を見て、商店街に参考になることは、何でしょうか。

■且尾／私も実は、にわかと言われるかもしれませんが「ノーサイドゲーム」のドラマを見て、モールもラックも分からないところから、ラグビーがだいぶ分かるようになりました。力と力のすごいぶつかり合いですね。サッカーや野球は、時間の間合いがあるんですが、ラグビーは力を出し切っている。昨日、残念ながら南アフリカに敗れましたが、チームジャパンは本当に力を出しました。

我々商店街でも力をどこまで出し切れるか。時間などの制約がある中で、自分のできることを精一杯やって、感動を与えられれば。我々がやったことで何か社会に貢献できることがあれば良いなという気がします。

■会場／アオキ選手の講演のところで、私の心に響いたことがありました。何でいつも自分たちが説明しなければいけないのか。健常者がどうやって勉強するのか。

数ではどうしても健常者のほうが多くて、障害のある人が伝えたいことを発信するのに勇気がいたり、難しかったりします。健常者がそういうことを学ぶ場は、どういうきっかけや、どういう場所で作られていたら良いのでしょうか。自分の子どもにも少し病気があるので、その辺りの話をもうちょっと伺えたらと思います。



■ Aoki / Respect and learning is more important than anything else. When you tell your thoughts to others, it's important that you respect the people you are trying to tell your thoughts to. Even when talking about disability, my disability is different from other people's disabilities. There are also problems for elderly people too. You can't just talk about disability in broad strokes. Learning that is really important.

It's vital to communicate and respect each other. It's also important to work to communicate as well as possible, and respect the people you're dealing with.

■ 井上 / 結構、難しいですね。学生たちもボランティア活動などをして、コミュニケーションをとって相手を理解することがないと、想像だけではできないし。子どもさんたちにも、いろいろな所で、いろいろな体験ができるプログラムがあると良いですね。今日は世田谷区の教育委員会の方もいらしていたので、そういった良さを生かしていただければなと思います。日本は今までは“閉じ込めてしまう福祉”でしたが、それではダメで、障害がある人もない人も、同じ所で同じように学べるとうろができると良いし、こういうシンポジウムも開かれれば良いと思います。

2020 年に向けて

■ 井上 / 最後は、それぞれのシンポジストの方々に、来年に向かってのコメントをいただきたいと思います。

■ 瀧 / 2020 年にオリンピック・パラリンピックが日本で開催されることが決まってから、バリアフリーなどが充実し始めていると、私自身とても感じています。

■ アオキ / 大切なことは、尊敬と学びです。私たちが自分の考えていることを他の人に伝えるときに、伝えようとする人たちに対して、敬意を持つことが必要です。障害といっても、私が持っている障害と他の人たちが持つ障害は違うし、お年寄りの中にもいろいろ困る問題を持っている人もいます。ひとくくりに障害とはこう、とは言えない。それを学ぶことが、非常に重要だと思います。

コミュニケーションをとって、お互いに敬意をもつことが必要。そして、一番良いコミュニケーションをとりたいと努力をしながら、敬意を持って他の人に接することが大切です。

それがそこで切れたらいけないと思います。大会終了後もずっとそれがつながって、よりもっと推進されれば良いなと思っています。

■井上／瀧さんは何をチャレンジしますか。

■瀧／来年はまたフィリピンに行きたいし、私は社会福祉士の国家試験を受けるために今勉強しているので、そのために必要なソーシャルワーク実習に行きます。

■且尾／私は今日の話をお聞きして、商店街で何ができるか考えていくことが重要だと思いました。設備面で、急に通路や店を広くするとか、物を減らす、ということはなかなかできませんが、それを自分たちのできる心遣いや気づきで何とかしていきたいと思います。

昔スキー場で、一本足で滑っている人を見たことがあります。片足で、普通に超えられないようなところをジャンプしながら、気持ちよく、きれいに滑っていて、すごいと思いました。

健常者とか、健常者じゃないとかではなく、みんなそれぞれ、できること、できないことがある。それは、いろんな分野があるというだけのことです。それを今日の話聞きながら思いました。とにかく我々ができる範囲で、商店街は資金力もあまりあるわけではないけれど、できることでバリアを少しずつ減らしたいと思いました。

■廣瀬／前回のワールドカップでは、日本チームは3勝1敗でクォーターファイナル（準々決勝）まで行けませんでした。今回は行けました。次はベスト4に向けてどのような準備をしていくかが重要だと思います。

どうすれば良いか。1つは、トップリーグ、上のクラスを充実させていく。



強い国と定期的に試合をしていくこと。もう一つ、長期的に考えると、グラスルーツ、裾野を広げていかなければいけない。ラグビーだけでなく、車いすラグビーを半年やって、ラグビーを半年やるとか、サッカーをやるとか、いろいろなスポーツを体験できるアカデミーを作っているようなことができれば、うれしいなと思います。

来年のパラリンピックでは、決勝戦が日本対アメリカになると良いですね。良い試合を見たいです。車いすラグビーの素晴らしさが伝わるような試合をしてほしいし、それをどういふふうサポートするのが大事だと思います。

僕自身は、「スクラムユニゾン」というプロジェクトをやっています。出場国の国歌を覚えて、スタジアムで一緒に歌おうというものです。アメリカもそこにももちろん入っています。YouTube で検索してください。それを覚えて、試合中は敵ですが、試合前後は一緒に応援する。日本の国歌もアメリカの国歌も歌って、良いパフォーマンスの手助けができれば、良いレガシーになっていくのではないかと思います。

■井上／今日は、「サンキュー・ジャパン」のキャンペーンで来てくれましたが、アメリカチームの皆さんは来年に向かっていかがでしょうか。パラリンピックもありますので、それなりに燃えるものをお持ちですか。

■Wheeler／I think we'll continue what we've been doing up until now. I want to continue with this amazing team culture we have of supporting each other and helping each other to grow. We have a family-like culture in our team. I hope to continue this and aim for a gold medal.



■ウィーラー／我々が今までやってきたことを続けるまでだと思います。我々が持っている素晴らしい文化、つまりお互いを支え合い、成長し高め合うことを続けていきたい。家族という文化がチームにありますので、それを続けて、最終的にはもちろん金メダルを目指したいです。

■井上／今日は世田谷区と日本大学共催で、シンポジウムをやらせていただきました。障害があろうがなかろうが、スポーツを愛する人がいます。コミュニケーションをいかに取るのかという点で、今日も通訳の方に助けてもらっていますが、言葉を乗り越えたところでコミュニケーションができるのが、スポーツの良さだと思います。YouTubeにもアップされています。すごいです。あんなにぶつかって、本当に大丈夫なのかということをやられています。みんなで盛り上げていけば、選手の皆さんも頑張ってもらえると思います。障害あるなしに関わらず、これからも良いスポーツをしてください。

世田谷区はユニバーサルデザインの都市なので、スポーツだけではなく、様々変わっていければと思います。日本大学も同様です。今、建て替えが順番に進んでいます。1つだけ歴史的な建物が残っていますが、それは学生がお互いに助け合える場になれば良いと思います。皆さんにも、お力添えをお願いします。

今日は世田谷区、アメリカ大使館、アメリカチームの皆さん、廣瀬さん、商店街の理事長にも参加していただき、ありがとうございました。

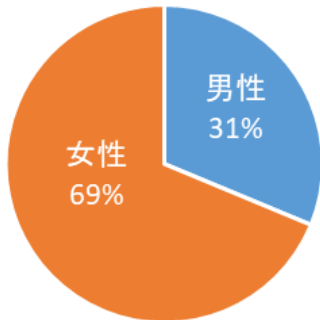


5. アンケート集計結果

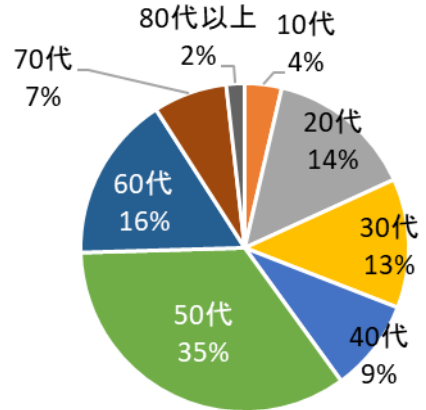
アンケート集計結果 (回収数 60)

1. 回答者情報

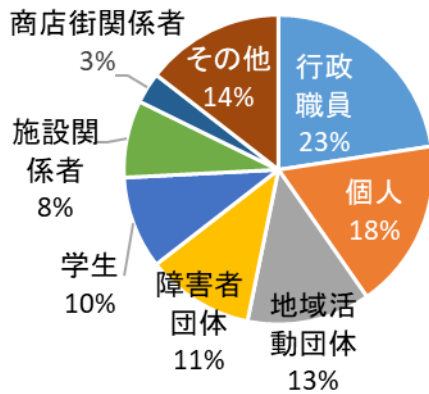
① 性別



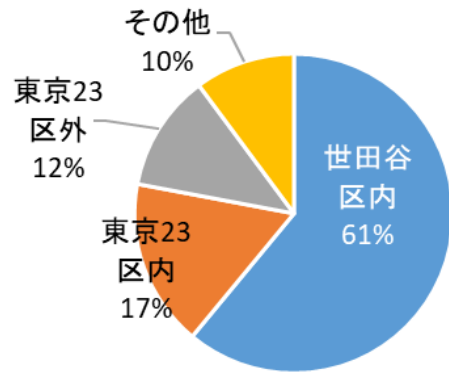
② 年齢



③ 立場・所属

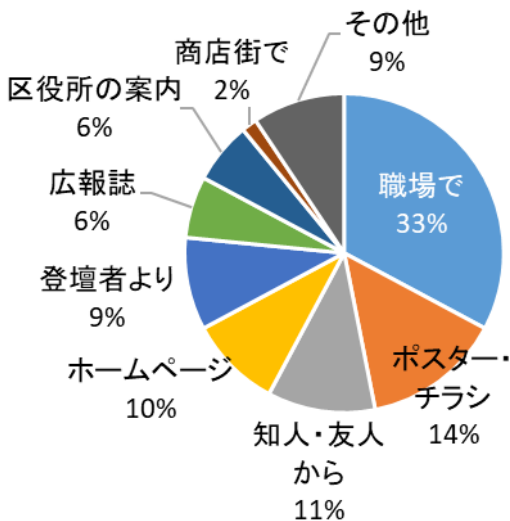


④ お住まいの地域

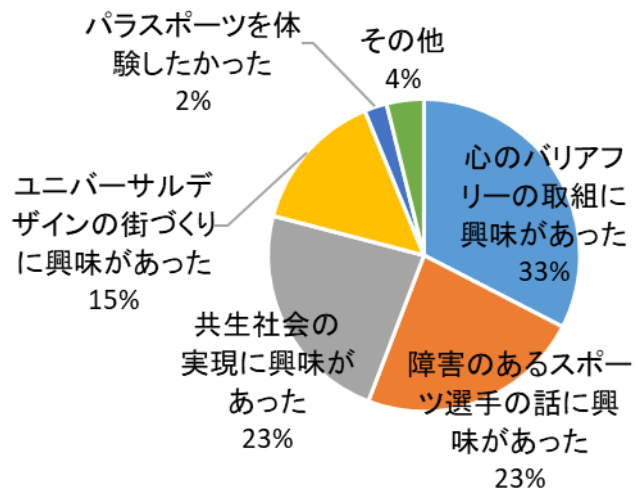


2. 参加目的 (いずれも複数回答可)

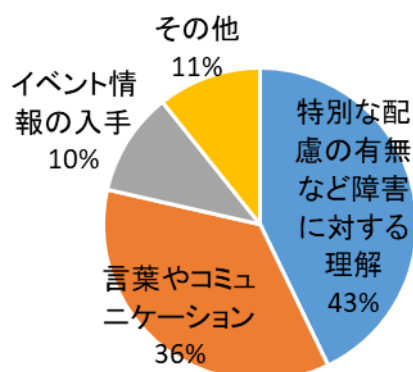
① このイベントは何で知りましたか



② どのようなことを目的に参加しましたか

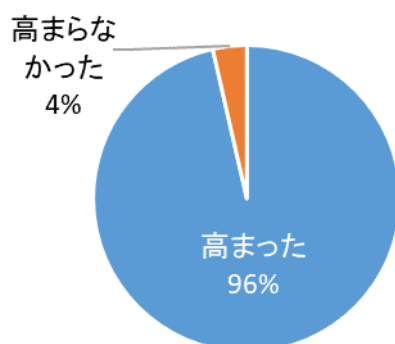


③参加する前に不安だったことや困ったことは何ですか



3. このシンポジウムに参加して

①共生社会実現に向けた取組みへの興味・関心は高まりましたか

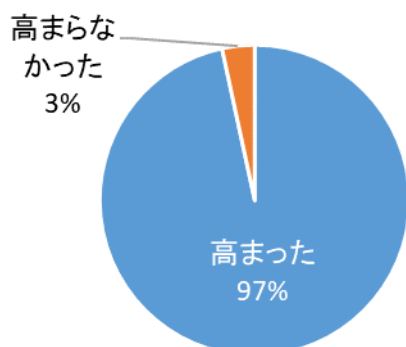


<主なご意見>

- ・施設・設備のバリアフリー、法制度もさることながら、コミュニケーションの重要性を深く感じた。
- ・商店街の取組みに大変感心した。
- ・面倒でも当事者が参加することは重要だと思った。
- ・社会モデルの考え方をもっと浸透させたいと感じた。
- ・障害者、健常者問わず全ての方々が平等で豊かな社会づくりを目指すという理念に心を打たれた。

- ・スポーツ以外のイベントにも参加したい。
- ・自分もヘルプマークを持っている（見えない障害がある）ので、関心は高い。

②パラリンピックへの興味・関心は高まりましたか

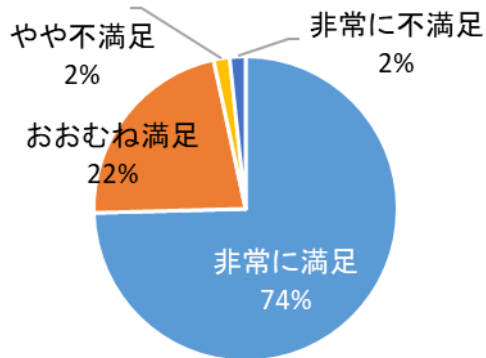


<主なご意見>

- ・車いすラグビー・パラスポーツを、観戦・応援したい。
- ・本物を生で見たい。実際に車いすに乗ってみたい。
- ・登壇者が出場することで関心が高まった。
- ・日本以外にも身近に感じられる選手・チームがいると楽しみが増える。
- ・パラスポーツの競技を知らないことに気づいた。
- ・元々関心はあったが、さらに自分にできることはないか、考えるきっかけになった。

- ・車いすラグビーのことは知らなかったが、メンバーの話を聞いて応援したくなった。
- ・アメリカパラリンピアンが仰る「スポーツの力」を来年のパラで体感したい。

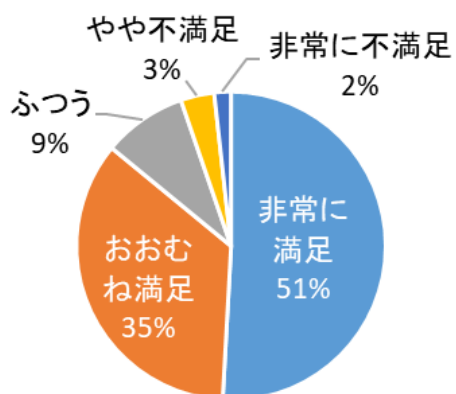
③ 第一部の満足度はどの程度ですか



<主なご意見>

- ・アオキさんの話はとても分かりやすく、内容がよかった。
- ・アメリカの事情が分かった。
- ・ADA法について興味を持った。
- ・障害がある方に対してステレオタイプな認識で対応し、過剰に手助けしたりこちらがリミットを設定することが、とても失礼だと改めて考えさせられた。
- ・車いすユーザーとして共感できる部分が多かった。
- ・誰にでも挑戦する権利があるというのは、本当だと実感した。
- ・実際に話を聞くというのは大事だと痛感した。
- ・自分が見ている視点の狭さを感じ、発見が多かった。
- ・“人間”としてリスペクトすることの大切さを改めて気づかされた。
- ・アメリカでの障害者の歴史や思いを直接聞いたことで、私の心のバリアフリーが一步前進したように思う。

④ 第二部の満足度はどの程度ですか

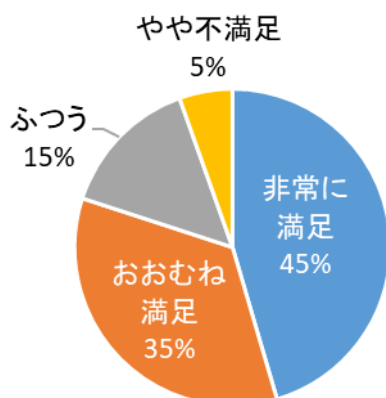


<主なご意見>

- ・アメリカの障害者の生の声、パラスポーツ選手の生の話を聴けてとても有意義だった。
- ・フランクに話が聞けてよかった。スポーツの裏話も聞けた。
- ・スポーツに対する高い意識とコミュニケーションの大切さを強調されていたのが印象的だった。
- ・パラ選手だけでなく、商店街理事長や学生も参加したのは意外だったがよかった。
- ・それぞれの分野で頑張っている皆さんのお話はとても心に響いた。
- ・手を貸す、声をかける、リスペクトする が重要なのだと思った。
- ・「相手に対する敬意」がキーワードではないかと思う。とかく障害者は「できない」ことを数え上げられ侮られたり見下されたりする。同じ人間として対等の目線、相手を尊重する心が大切。

- ・ユーモアを交えながらのやり取りがとてもよかった。
- ・どんな質問にも、パラリンピアンが真摯に答えてくれてよかった。
- ・単なるスポーツマンだけでなく、ロジカルなメッセージをプレゼンできるレベルの高い人材であると感じた。
- ・瀧さんがとてもしっかりしていて素敵だった。
- ・瀧さんの、商店街のまち歩きでの「ハード面のバリアフリーはまだでも、心遣い、心のバリアフリーを感じた」という言葉が印象的だった。
- ・アメリカでは手助けしてくれる人が多すぎて困るというパラリンピアンが発言が衝撃だった、という瀧さんの言葉が、日本の現状と思った。
- ・パネラー同士の対話にもつながればよりよかったと思う。
- ・様々な方面の方が参加して下さったが、少し時間が足らなかったように思う。もっと時間をとっていろんな話を聞きたかった。

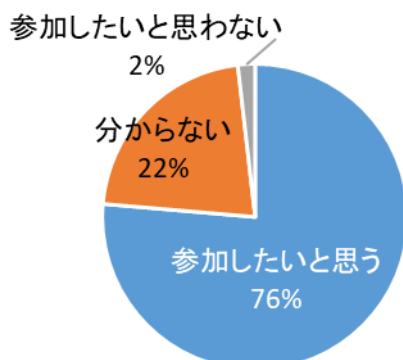
⑤主催者団体の対応はいかがでしたか



<主なご意見>

- ・門から会場まで道案内があつてよかった。
- ・学生さんが頑張っていた。
- ・机のある会場でメモが取りやすくよかった。
- ・冷房が効きすぎて寒かった。
- ・スタッフが動きすぎていた。

⑥今後同様のイベントがあった場合、参加したいですか



⑦今後参加してみたいイベント内容やご要望は

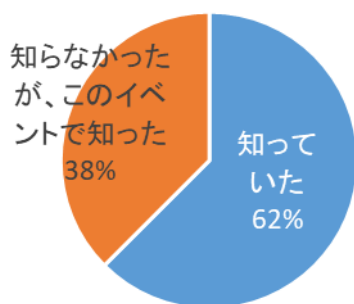
- ・パラスポーツの体験をしてみたい。
- ・スポーツと絡めた会に参加したい。
- ・平日の参加は難しいので土日に開催してほしい。
- ・見た目に分かり、配慮してもらいやすい障害だけでなく、分かりづらい障害（知的精神発達）の方々の理解を深める機会も作ってほしい。

⑧シンポジウム全体を通してのご意見・ご感想

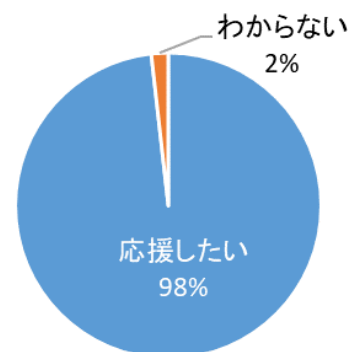
- ・もっと区民に周知が必要と思う。とてもよい講演だった。
- ・自分に差別する意思がなくても自然にすりこまれているのが差別なのかなと思った。
- ・日本では“できない”ところを察して周囲が動かなくてはいけない、という雰囲気が強いと感じる。「察しなければいけない」ということが強すぎると、失敗は許されないことになり、固い関係になる。障害のカミングアウトも難しさを感じる。考えさせられた。
- ・スペシャルオリンピックスにも言及してほしかった。
- ・世田谷区が実現したい「共生社会」が、シンポジウムであまり触れられていなかったのが気になった。
- ・来年と言わず、年に何回かこういうシンポジウムが活性化され開催されるとよい。
- ・スペシャルゲストに廣瀬さんがいらして驚いた。学生さんのお話も聞けてよかった。心のバリアフリーを進めるために、何をしたらよいのか難しい課題だと思うが、これからもいろいろな企画を期待する。
- ・車いすで登壇するときのスロープは角度がややきつそうだった。
- ・車いす用のトイレが少し変わった様式で戸惑ったが、言葉をかけて下さる方がいて助かった。この場を借りてお礼申し上げます。
- ・廣瀬さんのツイッターを見て軽い気持ちで参加した。パラスポーツを通して心のバリアフリーの勉強になった。2020setagaya の何らかのお手伝いをしたい。
- ・来年4月に日大に入学し、福祉に関することを学んでいくので、今日得たものを忘れずに頑張ります。
- ・子供にも今日のことを伝えたいと思う。
- ・とても勉強になった。新しい気づき、また自分の人生の活力となった。とても元気をもらって素晴らしい一日となった。
- ・日大の皆さま、ありがとうございました。

4. 共生社会ホストタウンについて

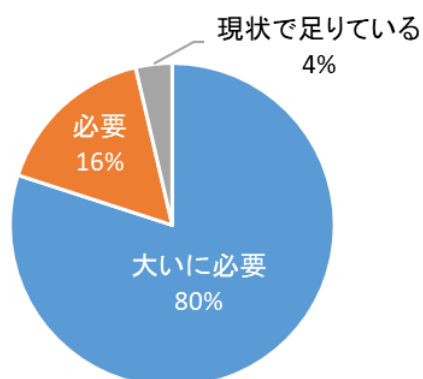
①世田谷区が共生社会ホストタウンになっていることを知っていましたか



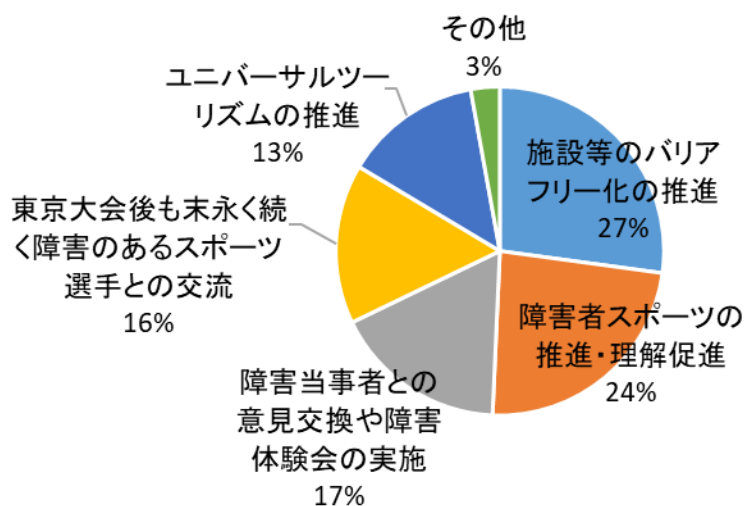
②本日のイベントを通じて、パラリンピックの出場選手を応援したいと思いましたが



③障害がある人が地域社会やイベントなどで活躍できる場を増やすことが必要だと思いますか



④共生社会ホストタウンの取組みとして、今後、どのようなことを期待しますか
(複数回答)



<主なご意見>

- ・ヘルプマークの理解が進むこと。
- ・2020年の大会後も、心のバリアフリーへの活動が続くこと。
- ・パラリンピックがあつて、社会が変わつた・よくなつたと実感できること。
- ・人の考え方や価値観が変化すること。

5. その他気づいた点やご意見等

- ・私は北米で長く生活していたので、やはり日本は少し遅れていると感じる。もう少し障害者も含め他人に興味を持つ姿勢を日本人に持ってほしい。
- ・アメリカはすべて人権を要求するアクションからスタートしている。黒人もバリアフリーも一緒。日本はそこが不明確で誰かが抑圧されたり、不自由な存在を隠す精神性が強いため、勝ち取った権利意識がない、または知らされていない。メディアの問題も大きい。

- ・最近の周囲はほとんどが高齢者で杖や歩行器で歩く人ばかり。世田谷区自体が高齢化してバリアフリーをどこよりも推進しないとゴーストタウン化すると実感している。全員が弱者になりつつあることを認識すべき。
- ・“ゆるスポ”=競う、勝負の世界のスポーツと異なり“できる”ことに注目して“楽しむ”ためのルールを作っていく、遊びに毛が生えたようなゲーム。ルールにシビアで優勝を求めるスポーツではない考え方も必要ではないかと感じた。

6. 登壇された車いすラグビー代表へのメッセージより（一部抜粋）

- ・ラグビーワールドチャレンジ 2019 での優勝おめでとうございます。試合でお疲れのところ、素晴らしいお話をありがとうございました。我々の意識の中のバリアフリーは簡単なことではないかと思いますが、東京 2020 大会が大きなきっかけとなるよう、私も仕事を通じて頑張りたいと思います。
- ・ワールドチャレンジ チャンピオンおめでとうございます。本当に激しいスポーツで驚きました。2020 パラリンピックも素晴らしいパフォーマンスを楽しみにしています。また日本で待っています。
- ・時間を割いてくださったことに感謝します。一度でも直接姿を見た方の競技はすごく身近に感じるし応援したくなります。ケガに気をつけてナイスゲームを見せてください！
- ・優勝おめでとうございます。日本も強いと聞いていましたが、素晴らしい戦績です。日本はもっとバリアフリーと心のバリアフリーを推進しますので、どうぞまた来日してください

アンケート結果を踏まえての実施報告

1. 参加者について

参加者は、行政関係・地域活動団体・障害者団体が多く、「心のバリアフリー」に関心がある層の割合が高い一方、ゲストがパラリンピアンなど著名人であったため、「(障害者)スポーツ」の切り口からも興味を持たれたことが分かる。

また、参加を区民に限定せず、時間帯も平日日中であったことなどから、近隣を含めた広い地域からの来場者があった。従来の「障害者・まち 交流塾」は、平日夜に開催されていたが、今回は日中で、会場が大学ということもあり、学生（入学予定の高校生含む）の参加があったことなど、年齢層にも広がりが見えた。

2. 実施効果

「共生社会実現」「パラリンピック」に関して、いずれも関心が高まったとの回答が大勢を占めた。前日の「車いすラグビーワールドチャレンジ 2019」で優勝したメンバーが登場したこと、ラグビーワールドカップも日本で開催されており、話題性のある時期であったことに加え、メディアに登場している著名人がスペシャルゲストとして来場されたため、パラリンピック、特に車いすラグビーへの関心が高まったという声が非常に多かった。同時に「今まで知らなかった」、「知らなかったことに気づかされた」という意見もあり、意識を向けさせる・興味を持たせる目的は大いに達成されたと思われる。

3. 第一部 チャック・アオキ氏の講演について

満足度は大変高かった。アメリカは世界で初めて、障害を理由とする差別を禁止した法律、ADA法（障害を持つアメリカ人法）を制定した国であり、その精神が社会に根付いている点が日本と大きく違う。日本でも障害者差別解消法が施行されて3年以上経つが、国民の認知度は大変低く、障害者を「障害者」と一括りにするのではなく、一人ひとりの個性ある「個人」であるという、本来当たり前である認識すら、参加者には目新しく捉えられた様子が窺える。

アスリートの視線から、スポーツを通しての話であったため、堅苦しくなく、身近でアクティブな印象もあり、力強いメッセージを受け取ったと捉えた意見も多くあった。

「無意識のうちに、周囲が挑戦の機会を奪っている」という発言に対しては、悪気なく「差別」してしまっている現実に、障害者差別の根深さを痛感した参加者も多かったと思われる。

4. 第二部 パネルディスカッションについて

こちら満足度は高かった。登壇者のアメリカ人特有の明るさ、前日の優勝チームを祝福する客席のムード、コーディネーターのユーモアを交えた進行などから、終始、柔らかい雰囲気であった。スペースの都合上致し方なかったのだが、コーディネーターが客席側に位置していたのも、登壇者と客席とが一体化してよかったのかもしれない。

登壇者は、パラアスリートのほか、元選手、商店街関係者、学生（障害当事者）と、分野が様々だが、それぞれの立場から感じる「バリアフリー」についての思いが語られ、チームメイト同士、障害者と健常者、商店と客、いずれもコミュニケーションが大切であることが確認された。ハード面でのバリアは、心のバリアフリーでクリアできるといった発言もあり、そのためにも、コミュニケーションの取り方が重要となる。言葉を介さないスポーツも答えの一例であるが、相手を理解する、体験を重ねる、敬意を持って接する 等、コミュニケーションをうまく取る方法を見つけることが課題として見出された。

5. 全体を通じて、今後に向けて

・バリアフリーについて考える機運の継続を

講演、パネルディスカッションともに、満足度は高く、このような機会をもっと設けてほしいと望む声も多く聞かれた。幸い、来年に迫った大会に向けて、これからも盛り上がりを見せると思われるが、その後が重要になる。瀧氏の発言にもあったが、せっかく盛り上がったバリアフリーへの関心の機運を大会終了とともに終わらせず、継続性を持たせるために何ができるのかを考える必要がある（シンポジウム等の開催、障害者スポーツ体験会、当事者との交流 等）。

・技術の進化、福祉用具やツール等の普及

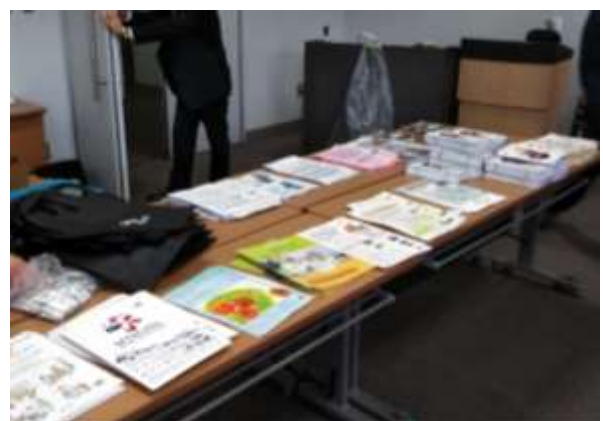
パラリンピアンは、自らの身体に完全にカスタマイズされた車いすによって、最高のパフォーマンスが可能となり、それを見た他の障害者に夢や希望を与えられる。心や目に見えないものも、もちろん大切だが、物理的な面での進化も、一度きりの人生を充実させる上で重要となる。コミュニケーションを促進する上でも、様々なツールの開発・普及が望まれる。

また、単に物が供給されるだけでなく、適合性が重要。使用する人の状態・用途にマッチしたものでないと効果は発揮できない。それを見極める目を養うこと、その機会を提供することも必要となってくる。

6. 全体記録・資料

(1) 当日の様子

○控室での打合せ・準備



○受付・誘導



○司会・手話通訳



○Thank You, Japan フォトセッション



○パラリンピアンの様子

(左：まちの点検後、取材を受ける／右：会場入場前)



(2) パラリンピアンよりいただいたメッセージボード



Josh Wheeler:

Thank you for hosting us. I look forward to being able to return and learn more about your culture. It's a pleasure to be here.

ジョシュ・ウィーラー選手:

素晴らしいおもてなしをありがとうございます。
また日本に来て、もっと日本の文化を学ぶのが楽しみです。今日ここに来られてうれしいです。



Joe Delagrave:

Thank you for hosting us in your beautiful city!
All the best!

ジョー・デラグラーブ選手:

美しいまちでおもてなししてくださり、ありがとうございます！ 皆さんに幸あれ！

Chuck Aoki:

Thank you Setagaya for hosting us!
We look forward to visiting again!
Go USA!

チャック・アオキ選手:

世田谷区の皆さん、私たちを
おもてなししてくれてありがとうございます！
再び訪れることを楽しみにしています！
頑張れ USA!



Chuck Melton:

Thank you for your hospitality!

チャック・メルトン選手:

おもてなしをありがとうございます！



(3) PR ツール

○ポスター



「共生社会ホストタウン」推進事業

心のバリアフリー シンポジウム

—アメリカ代表パラリンピアン(車いすラグビー代表)とともに
まちの点検を通して考える—



令和元年 10月 21日(月)
13:30~16:00 (13:00開場)

**参加
無料**

第一部：講演
(アメリカ代表パラリンピアン)
アメリカ合衆国におけるバリアフリー等の現状を話していただきます。

第二部：パネルディスカッション
(コーディネーター：井上仁氏／日本大学文理学部社会福祉学科教授)
パラリンピアンのほか、日本大学文理学部学生、グリスデイル・バリージョシュア氏、
下高井戸商店街の方にもご参加いただき、まち・心のバリアフリーについて考えていきます。



グリスデイル・バリージョシュア (Barry Joshua Grisdale) 氏
カナダ生まれ。四肢まひ性・脳性小児まひにより、4歳より車いす生活。高校卒業時に父親と一緒に日本に約1か月滞在。平成19年に来日し、平成28年に日本国籍を取得。都内で生活しながら、高齢者施設で勤務し、アゼリーグループのホームページのWebマスターとして活躍しつつ、海外の障害者に向けた日本観光の英語情報サイト(※)を運営するほか、これまでの知識・経験を生かし、国や自治体、企業が行うシンポジウムや講演会に参加する等、活躍中である。
※「ACCESSIBLE JAPAN」<https://www.accessible-japan.com/>

会 場：日本大学文理学部(世田谷区桜上水 3-25-40) 図書館棟3階 オーバルホール
定 員：先着 130名(要申込) ●申込み先：せたがやコール 電話 03-5432-3333/FAX03-5432-3100
(電子申請可 <https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/kusei/010/002/index.html>)



●主催：世田谷区 ●共催：日本大学文理学部 ●後援：世田谷区商店街連合会、アメリカ大使館 ●協力：下高井戸商店街振興組合
●担当：世田谷区障害福祉部障害施策推進課



「共生社会ホストタウン」推進事業

心のバリアフリーシンポジウム

— アメリカ代表パラリンピアン(車いすラグビー代表)とともに
まちの点検を通して考える—



第一部：講演
(アメリカ代表パラリンピアン)
アメリカ合衆国におけるバリアフリー等の現状を話していただきます。

第二部：パネルディスカッション
(コーディネーター：井上仁氏／日本大学文理学部社会福祉学科教授)
パラリンピアンのほか、日本大学文理学部学生、グリズデイル・バリージョシュア氏、下高井戸商店街の方にもご参加いただき、まち・心のバリアフリーについて考えていきます。



グリズデイル・バリージョシュア (Barry Joshua Grisdale) 氏
カナダ生まれ。四肢まひ性・脳性小児まひにより、4歳より車いす生活。高校卒業時に父親と一緒に日本に約1か月滞在。平成19年来日し、平成28年に日本国籍を取得。都内で生活しながら、高齢者施設で勤務し、アゼリーグループのホームページのWebマスターとして活躍しつつ、海外の障害者に向けた日本観光の英語情報サイト(※)を運営するほか、これまでの知識・経験を生かし、国や自治体、企業が行うシンポジウムや講演会に参加する等、活躍中である。
※「ACCESSIBLE JAPAN」<https://www.accessible-japan.com/>

※手話通訳・パソコンによる要約筆記あり

参加
無料

日 時：令和元年 10月 21日(月) 13:30～16:00 (13:00開場)

会 場：日本大学文理学部 図書館棟3階 オーバルホール
※詳細は裏面参照

定 員：先着 130名(要申込)

申込み：裏面の申込書にご記入の上、FAXでお送りください(電話申込・電子申請も可)。
締切 10月 14日(月) ※定員に達しない場合は、締切後も随時受付します。



このマークは目の不自由な方のための「音声コード」です

主催：世田谷区 共催：日本大学文理学部 後援：世田谷区商店街連合会、アメリカ大使館 協力：下高井戸商店街振興組合
担当：世田谷区障害福祉部障害施策推進課

○配布ちらし 裏面

心のバリアフリーシンポジウム 会場案内

会場：日本大学文理学部（世田谷区桜上水 3-25-40）
図書館棟3階 オーバルホール



交通：京王線・東急世田谷線 下高井戸駅 下車 徒歩8分
京王線 桜上水駅 下車 徒歩8～10分
小田急線 経堂駅 下車 徒歩20～25分

参加申込書

▼送付先／せたがやコール 宛
FAX 03-5432-3100
下記をご記入の上、お送りください。

◇電話でのお申込は 03-5432-3333まで(受付時間 8時～21時)
◇電子申請可 (<https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/kusei/010/002/index.html>)

締切／令和元年 10月 14日(月) ※定員に達しない場合は、締切後も随時受付します。

参加者氏名	住所	連絡先 TEL・FAX	団体名 ※任意記入	参加する上で、配慮してほしい点(〇の欄がある)等をご記入ください。

このちらしは、共同社会ホストタウン推進事業、心のバリアフリーシンポジウム、アメリカ代表バケリンピアン（@いづらびー 代表）とともにまの森会を通して考える、の案内です。

第一部は講演、アメリカ代表バケリンピアンに、アメリカ合衆国におけるバリアフリー等の現状を話していただきます。

第二部はパネルディスカッション、コーディネーターは、日本大学文理学部社会福祉学系 井上仁教授、バネラーは、バケリンピアンのほか、日本大学文理学部学長、グリアデイル・バリージョシア氏、下高井戸商店街の方にもご参画いただき、まちのバリアフリーについて考えていきます。

開催日は、令和元年10月21日(月) 13時30分から18時まで、会場には10名から入ることが出来ます。


会場は、日本大学文理学部・図書館棟3階オーバルホール。
参加費は無料、定員は先着130名、定員の超過は不可です。
当日は、手話通訳・パソコンによる筆跡写記があります。

参加を希望される方は、10月14日(月)まで、電話、またはFAX、ホームページよりお申し込み下さい。申込先は、せたがやコール。電話 0432-3333、FAX 0432-3100。区のホームページは、もちろ、区政情報、オンラインサービス・アプリ、電子申請、よりご確認ください。

定員に達しない場合は随時受付いたします。
FAXでの申込みは、表紙に参加者氏名、住所、連絡先、団体名（任意）、参加する旨の併記してほしい点を記載し、お送り下さい。

グリアデイル・バリージョシア氏
カナダ生まれ、米教員生活・舞臺小児まひにより、4歳より車いす生活。高校卒業時に父兄と一緒に日本に約1年間滞在。平成19年に戻り、平成28年に日本国籍を取得。国内で生活しながら、登録者施設で障害アスリートグループのホームページのWebマスターとして活躍しつつ、海外の障害者に自らの日本観光の奨励情報サイトを運営するほか、これまでの知識・経験を生かして、区や自治体、企業が行うシンポジウムや研修会に参加する等、活躍中である。

主催 中口谷式、共催 日本大学文理学部、後援 世田谷区商工促進会、アメリカ大使館、札幌 世田谷区障害福祉部障害推進課



ちらし表面に挿入された
音声コードの文章

(4) 当日配布資料 (一般用)


「共生社会ホストタウン」推進事業
心のバリアフリー
シンポジウム
 —アメリカ代表パラリンピアン(車いすラグビー代表)とともに
 まちの点検を通して考える—


【日時】 令和元年(2019年)10月21日(月)
 13時30分~16時00分
【場所】 日本大学文理学部 図書館棟3階
 オーバルホール
【主催】 世田谷区
【共催】 日本大学文理学部
【後援】 世田谷区商店街連合会、アメリカ大使館
【協力】 下高井戸商店街振興組合

日の不自由な方のための拡大資料・音声コード付き資料を、別途ご用意しています。

プログラム

開会(13時30分)

○主催者あいさつ 世田谷区
 ○共催等あいさつ 日本大学文理学部
 アメリカ大使館

○第一部 講演

アメリカ代表パラリンピアン(車いすラグビー)

- ・ジョー・デラグレーブ (Joe Delagrave) 氏
- ・チャック・アオキ (Chuck Aoki) 氏
- ・ジョシュ・ウィーラー (Josh Wheeler) 氏
- ・チャック・メルトン (Chuck Melton) 氏

○第二部 パネルディスカッション

■パネラー

- ・アメリカ代表パラリンピアン(車いすラグビー)
- ・グリスデイル・バリジョシア (Barry Joshua Grisdale) 氏
- ・下高井戸商店街振興組合 理事長 口尾 衛 氏
- ・ラグビー元日本代表主将、俳優 廣瀬 俊朗 氏
- ・日本大学文理学部社会福祉学科 齋 楓花 氏

■コーディネーター

日本大学文理学部社会福祉学科 教授 井上 仁 氏

終了(16時00分)

- 1 -

当日配布資料 (音声コード入り)

「共生社会ホストタウン」推進事業
心のバリアフリー シンポジウム

【日時】 令和元年(2019年)10月21日(月)13時30分から16時00分
【場所】 日本大学文理学部 図書館棟3階 オーバルホール
【主催】 世田谷区
【共催】 日本大学文理学部
【後援】 世田谷区商店街連合会、アメリカ大使館
【協力】 下高井戸商店街振興組合

○プログラム

開会(13時30分)

主催者あいさつ 世田谷区
 共催等あいさつ 日本大学文理学部、アメリカ大使館

○第一部 講演

アメリカ代表パラリンピアン(車いすラグビー)

- ・ジョー・デラグレーブ 氏
- ・チャック・アオキ 氏
- ・ジョシュ・ウィーラー 氏
- ・チャック・メルトン 氏

○第二部 パネルディスカッション


パネラー

- ・アメリカ代表パラリンピアン(車いすラグビー)
- ・グリスデイル・バリジョシア 氏
- ・下高井戸商店街振興組合 理事長 口尾 衛 氏
- ・ラグビー元日本代表主将、俳優 廣瀬 俊朗 氏
- ・日本大学文理学部社会福祉学科 齋 楓花 氏

コーディネーター

日本大学文理学部社会福祉学科 教授 井上 仁 氏

終了(16時00分)



○登壇者のご紹介

○ジョー・デラグレーブ 氏 (車いすラグビー：クラス 2.0)

1985年生まれ。 Wisconsin州ラシーヌ出身。 Wisconsin州プレーリー・デュシェイン 在住。 チーム/クラブ: Ability360 Heat


パラリンピック/2012年ロンドン(銅メダル)
 世界選手権/2010年(金メダル)、2014年・2019年(銅メダル)
 2003-04年にウィリアムズ州立大学でフットボール選手として活躍。2004年7月ポートランドに引っ越し、5人兄弟(3女2男)。兄は Braxton, Brayden, Brynley の3人の子どもに恵まれる。趣味は、ハンドサイクリング、キャンプ、旅行、家族と過ごすこと。

○チャック・アオキ 氏 (車いすラグビー：クラス 3.0)

1991年生まれ。ミネソタ州ミネアポリス出身。ミネソタ州ミネアポリス 在住。パラリンピック/2012年ロンドン(銅メダル)、2016年リオ(銀メダル)
 世界選手権/2010年(金メダル)、2014年・2018年(銅メダル)
 遺伝性発達障害自立神経性ニューロパシー-type II のため膝から下と腕から下に麻痺があり、人生の大半を車いすで過ごす。11年間車いすバスケットボール選手として活躍した後、2005年の映画「マザーボール」(邦題「殺人球」、車椅子ラグビーのドキュメンタリー)に影響を受け、2009年に国際大会デビュー。2011年に「4人制ラグビー協会最優秀選手賞」を授賞。全米の学校で Classroom Champions のメンバーとして子どもたちの指導も行っている。国際パラリンピック委員会のウェブページにブログ掲載。趣味は、クロスワードパズル、読書、「ゲーム・オブ・スローンズ」、歴史小説、ミネソタスポーツ。

○ジョシュ・ウィーラー 氏 (車いすラグビー：クラス 2.5)

1980年生まれ。カルフォルニア州サクラメント出身。アリゾナ州ツーソン 在住。パラリンピック/2016年リオ(銀メダル)
 世界選手権/2014年・2018年(銅メダル)
 2006年オートバイで走行中、車と衝突。首を骨折、下半身不随となり、右腕と手の一部も動かない。11人兄弟(男女5人)。既婚。スペイン語が堪能。





Joe Delagrave
Wheelchair Rugby
Team USA

Next year, my teammates and I will travel to Japan to compete in wheelchair rugby at the Tokyo 2020 Paralympic Games. This will be my second Paralympic Games. I am excited to compete and have the chance to return to a country with so many incredibly welcoming and respectful people.

I have had the honor of representing the United States in the sport of wheelchair rugby for 11 seasons and have been a co-captain for six. It has been an amazing experience filled with many highs and lows. Over that time, my Paralympic goals have evolved and grown. When I first started playing, I simply wanted to make the team. After accomplishing that, I aimed to win a medal.



ジョー・デラグレーブ
車いすラグビー アメリカチーム

来年、私たちは、東京 2020 パラリンピック出場のために日本へ行きます。私にとっては、2 度目のパラリンピックになります。

日本人は、とても礼儀正しく、以前来日した際も我々を暖かく迎えてくれました。その日本で再びプレーすることになりとてもうれしいです。

私は、11 シーズンに渡りアメリカ代表チームに所属し、そのうち 6 シーズンは、キャプテンを務めました。浮き沈みの激しいスポーツ生活でしたが、素晴らしい経験でした。この間、私のパラリンピックに対する目標も変わって行きました。初めは、チーム入りすることだけしか考えていませんでしたが、メンバー入りが実現すると、今度は、メダル獲得が目標になりました。

My teammates and I were completely focused on that goal and played hard at the London 2012 Paralympic Games. We were honored to play the talented Japanese team in the bronze medal game, and we were able to pull out the win and bring home the bronze medal. Then, in 2016, I didn't make the team. It was devastating, but I cheered on my teammates and was so proud when they won the silver medal. Now, as we look to Tokyo, our goal is on winning gold, and above all, doing so with honor and integrity. There are many talented teams, including the Japanese Team, and we look forward to strong competition and exciting games in Tokyo next year.

Off the field of play, as a person living with a disability in the United States, most of the time I can live a normal lifestyle, in part, thanks to the Americans with Disabilities Act (ADA). The ADA is an American civil rights law that prohibits discrimination against those with disabilities. However, I still face every day challenges that can make daily life burdensome. Just a few examples: crossing small curbs on streets, dealing with difficult parking or navigating bathrooms that are too small.

2012年のロンドンパラリンピックでは、チーム全員がメダル獲得のために懸命にプレーしました。三位決定戦では、光栄にも優秀な日本チームと対戦。我々は、勝利し、銅メダルを本国に持ち帰ることができました。

ところが、2016年のパラリンピックでは、私は、メンバーに選ばれませんでした。絶望しましたが、それでもチームを応援し、アメリカが銀メダルを獲得した時はとても誇らしかったです。

東京2020では、金メダルが目標です。そして、何よりも誠実に誇りを持って戦い、金メダルを手に入りたいです。日本チームをはじめ、世界には、沢山の優秀なチームが存在します。来年、東京では、激しい競争とエキサイティングな試合が繰り広げられると思います。とても期待しています。

パラリンピアンとしてではなく、障害を抱えた一人のアメリカ人としては、ADA法（障害を持つアメリカ人法）のおかげでほぼ普通の生活を送ることができています。それでも、日常生活にしばしば支障をきたしています。例えば、道路のカーブが支障になったり、駐車場が困難だったり、トイレが狭すぎたりなどです。

But I choose to let these challenges be motivation for me to be a part of the solution, and to push for better access and equal opportunities for people living in America with disabilities.

We can all choose to be a part of the solution, regardless of what challenges life puts in front of us. Just like my athletic career has had its ups and downs, life doesn't always go the way we want it to. But every day we wake up with a choice to take one step closer to our goals. I truly believe it is through adversity that we grow and learn the most.

It is my hope that the citizens of Setagaya are inspired by the grit and determination of Team USA, Team Japan and all of the athletes competing at the 2020 Olympic and Paralympic Games. Japan is a country that has embraced my teammates and me, that has been welcoming and gracious and done so much for the advancement of the Olympic and Paralympic movements. Thank you to the city of Setagaya for hosting Team USA during the Tokyo Games. We are so grateful for the hard work that's going in to preparing for the Games, and for the enthusiasm the people of Japan have shown in welcoming us. We look forward to seeing you soon!

しかし、私は、こうした毎日直面する「困難」を「チャンス」と捉え、障害者にとってより便利な環境づくりや平等な機会を実現させるために役立てたいと思っています。

私たちは、人生で様々な問題に直面します。それがどのようなものであっても、「困難」を「解決の糸口」に変えることができます。私のスポーツ人生にも浮き沈みがありました様に、人生は、必ずしも望むように行くとは限りません。しかし、毎朝、私たちが新しい一日を始める時に、自分の目標を達成することに一歩でも近づくことができるように自分で決めることができます。人間は、逆境を乗り越えることによって成長し、最も多くのことを学ぶことができるのだと心から信じています。

2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会に出場するアメリカ代表チーム、日本代表チームをはじめとする全ての選手たちの情熱と決意が世田谷の人々を感動させることを願っています。日本は、オリンピック・パラリンピックの発展に大変貢献し、また、私たちチームを温かく受け入れてくれた国です。

世田谷区の皆さん、東京 2020 では、TEAM USA をサポートしていただきありがとうございます。日本の皆さんがオリンピックの準備に尽力し、また、私たちを歓迎してくださることに心から感謝しています。来年お会いするのを楽しみにしています！

実 施 日：令和元年 10 月 21 日

発 行 日：令和元年 12 月

主 催：世田谷区

共 催：日本大学文理学部

後 援：世田谷区商店街連合会、アメリカ大使館

協 力：下高井戸商店街振興組合

運営支援：特定非営利活動法人日本アビリティーズ協会

所 管：世田谷区障害福祉部障害施策推進課

電話 03-5432-2958 FAX 03-5432-3021